

飯倉 A 遺跡

—第1次調査—

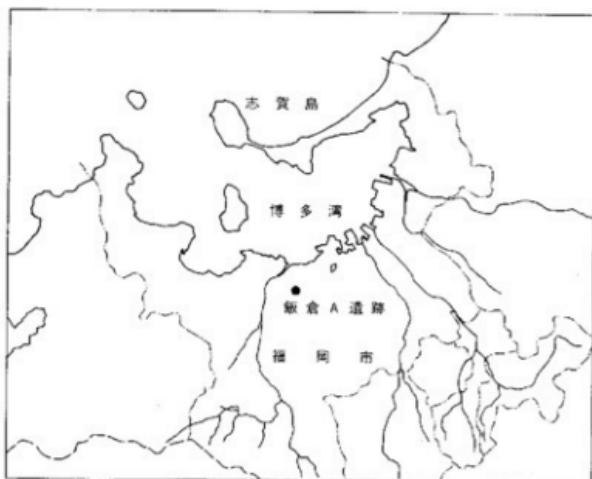
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第296集

1992

福岡市教育委員会

飯倉 A 遺跡

—第1次調査—



遺跡略号 IKR-A-1

遺跡調査番号 8835

1992

福岡市教育委員会

序

早良平野の東縁には、油山西麓から派生した帶状の低丘陵が北へ長くのび、西方には室見川が作り出した水田地帯が拡がっていました。しかし、福岡市の発展とともに急速に市街化が進み、往時の面影は次第に失われつつあります。

飯倉の低丘陵上には縄文時代から歴史時代にかけての遺跡が点在しています。殊に、弥生時代前期の腰棺墓に細型銅剣を副葬した飯倉原遺跡や5世紀後半に築造された前方後円墳である梅林古墳は著名です。

今回発掘調査した飯倉A遺跡は、この飯倉丘陵北部の東側斜面上にあり、古墳時代の竪穴住居址は、陽当たりのよい丘陵の南東斜面に造られたもので、当時の人々の工夫の跡が偲ばれます。

本書はこれらの発掘調査成果を収録したものです。本書が市民の皆さんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間にはご指導・ご助言をいただいた諸先生をはじめ、多くの方々のご協力をいただきました。殊に開発に当たられた株式会社西洋環境開発と丸信建設株式会社の方々には格別のご理解とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成4年1月13日

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

.....れいげん.....

- 本書は、1988年度に福岡市教育委員会が福岡市早良区飯食一丁目において緊急発掘調査した飯食A遺跡の発掘調査報告書である。
- 本古に使用した方位はすべて磁北方位である。
- 遺構は呼称を記号化し、堅穴住居址をSC、掘立柱建物址をSB、土坑をSK、溝をSDと記号化して呼称し、各遺構ごとのナンバーをその後に越けた。
- 本書に掲載した遺構の実測は小林・梶村嘉長が行なった。
- 遺物の整理実測と製図は小林・田崎真理が行なった。
- 本書に掲載した写真は遺構・遺物とともに小林が撮影した。
- 本報告に係わる遺物・記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。
- 本書の執筆・編集は小林が行なった。

遺跡調査番号：8835	遺跡略号：IKR-A	分布地図番号：73 A 1
調査地點：福岡市早良区飯食二丁目449-2外		
工事面積：1,090m ²	調査対象面積：850m ²	調査実施面積：550m ²
調査期間：1988年9月10日～11月19日		

本文目次

序

I. はじめに	1
1. 発掘調査にいたるまで	1
2. 発掘調査の組織	1
3. 立地と歴史的環境	3
II. 調査の記録	6
1. 調査の概要	6
2. 第1面の調査	7
1). 垂穴住居址	8
2). 土壙	9
3). 挿立柱建物址	14
4). 溝遺構	15
5). その他の遺構と遺物	16
3. 第2面の調査	17
1). 垂穴住居址	18
2). 土壙	19
3). 挿立柱建物址	26
4). 溝遺構	26
5). その外の遺構と遺物	27
4. 第3面の調査	29
1). 上壙	30
5. 包含層の遺物	33
III. おわりに	34

挿図目次

Fig. 1. 周辺遺跡分布図(1/25,000)	2
Fig. 2. 飯倉A遺跡位置図(1/5,000)	4
Fig. 3. 飯倉A遺跡現況図(1/400)	5
Fig. 4. 調査区東壁土層断面図(1/80)	6
Fig. 5. 第1面遺構配置図(1/200)	7
Fig. 6. SC-01実測図(1/60)	8
Fig. 7. SK-01・02実測図(1/60)	9
Fig. 8. SK-01出土石器実測図(1/3)	10
Fig. 9. SK-03~10実測図(1/40)	11
Fig. 10. SK-05出土石器実測図(1/1)	12
Fig. 11. SK-11~15実測図(1/40)	12
Fig. 12. SR-01~03実測図(1/80)	14
Fig. 13. SD-01~06断面図(1/40)	15
Fig. 14. 第1面遺構出土土器実測図(1/4)	16
Fig. 15. 第2面遺構配置図(1/200)	17
Fig. 16. SC-101・102実測図(1/60)	18

Fig. 17. SK-101~109実測図(1/40)	20
Fig. 18. SC-101・SK 101出土鉄器実測図(1/3)	21
Fig. 19. SK-103・106出土石器実測図(1/3)	21
Fig. 20. SK-110~113実測図(1/40)	22
Fig. 21. 第2面遺構出土石器実測図(1/1)	23
Fig. 22. SK-114~118実測図(1/40)	24
Fig. 23. SB 101実測図(1/80)	26
Fig. 24. SD 101実測図(1/80)	26
Fig. 25. 第2面遺構出土七器実測図(1/4)	28
Fig. 26. 第3面遺構配置図(1/200)	29
Fig. 27. SK 201~203実測図(1/40)	31
Fig. 28. SK-204~210実測図(1/40)	32
Fig. 29. 包含層出土土器実測図(1/4)	33

図版目次

PL. 1. 遺跡周辺航空写真

PL. 2. (1). 第1面南側調査区全景(北より)
(3). SC-01(南より)

(2). 第1面北側調査区全景(南より)

PL. 3. (1). SK-01・02(西より)
(3). SK-05(東より)

(2). SK-04(東より)
(4). SK-06(東より)

(5). SB-01~03全景(南より)

(6). SD-03(東より)

PL. 4. (1). 第2面南側調査区全景(北より)
(3). SC-101・SD-101(北より)

(2). 第2面北側調査区全景(南より)

PL. 5. (1). SC-101(北東より)
(3). SC-102(南より)

(2). SC-101遺物出土状況(東より)

PL. 6. (1). SK-101(西より)
(3). SK-106(東より)
(5). SK-108(西より)

(2). SK-102・103(西より)
(4). SK-107(西より)
(6). SK-113(東より)

PL. 7. (1). SK-114(東より)
(3). SK-116(東より)
(5). SD-101・SK-101~103(東より)

(2). SK-115(北より)
(4). SK-117・118(北より)
(6). SD-101遺物出土状況(東より)

PL. 8. (1). 第3面南側調査区全景(北より)
(3). SK-201・202・210(北より)
(5). SK-208(北より)

(2). 第3面北側調査区全景(南より)
(4). SK-201(北より)
(6). SK-209(東より)

PL. 9. 出土土器

PL. 10. 出土土器・鉄器・石器

表目次

Tab. 1. 第1面上土壤一覧表	13
Tab. 2. 第2面土壤一覧表	19
Tab. 3. 第3面上土壤一覧表	30

I. はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

福岡市西部に広がる早良平野の東縁には油山から派生した丘陵が長くのび、眼下の沖積地には一面に水田が続く自然の恵み多きところでした。しかし、急速にすすむ福岡市の人口増加は郊外の市街化を推し進め、四半世紀前の田畠には家々が建ち並び、更には高層化へと進んでいます。

1988(昭和63)年、本遺跡のある飯倉二丁目でも、既存の木造住宅に代わる高層の分譲マンション建設が、西洋環境開発と丸信建設の合併によって計画され、その旨の申請がなされた。しかし、申請地が「飯倉△遺跡群」内に立地することから埋蔵文化財の有無確認が必要となり試掘調査を実施した。その結果、申請地からは谷部に堆積した遺物包含層と土壤等の遺構が検出され、発掘調査による記録保存を図ることになった。

発掘調査は、当初計画の排土搬出が不可能になつたために調査区を南北に二分し、まず南側の調査区から開始した。発掘調査では竪穴住居址等を検出したが、これらの遺構面が遺物包含層中を含めて3面で確認された。そのため10月31日の契約期間内の調査終了が難しくなり、調査期間延長の必要が生じたが、両原因者のご理解をえて11月19日に発掘調査は終了した。

発掘調査では、谷間を利用した古墳時代の集落構成の一側面が判明し、これまで未調査区域であった飯倉丘陵の歴史を解きほぐす一助となつた。これも株式会社西洋環境開発や丸信建設株式会社の関係者各位のご理解とご協力に負うところが大きい。ここに記して感謝の意を表します。

2. 発掘調査の組織

調査委託 株式会社西洋環境開発 丸信建設株式会社

調査主体 福岡市教育委員会

調査統括 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

直務担当 飛高憲雄(第2係長) 岸田 隆 吉田麻由美

調査担当 小林義彦

調査・整理補助 岩本陽児(九州大学) 梶村嘉長 田崎真理

調査・整理作業 尾園 覧(九州大学) 荒巻ヤチ代 上原千代子 大瀬良清子 木村良子

坂田美佐子 柴田タツ子 田中聖子 津田和子 堀 滌代 土堀崎孝子 烏堀良

子 西島タミエ 西島初子 野坂三重子 橋本恵美子 馬場イツ子 飛良智子

松本藤子 吉岡アヤ子 吉岡貞代 吉岡竹子 吉岡蓮枝



1. 犬塚A遺跡 2. 西新町遺跡 3. 藤崎遺跡 4. 有田・小田部遺跡群 5. 原談儀遺跡
 6. 座遺跡 7. 飯倉遺跡 8. 原深町遺跡 9. 犬塚原遺跡 10. 干櫻遺跡 11. 鶴町遺跡
 12. 梅林古墳群 13. 七隈古墳群

Fig. 1. 周辺遺跡分布図(1/25,000)

3. 立地と歴史的環境

福岡市の西部に拡がる早良平野は、背振山地を背にして北の博多湾にむかって開口する狭小な平野で、東は油山山塊に福岡平野と、西は飯盛山から長垂山とつづく山塊によって糸島平野と連されている。この平野は、背振山地から流れだした室見川によって造り出された沖積地と博多湾岸の海岸砂丘からなり、平野内には第三紀丘陵と洪積台地が点在している。

この早良平野の東縁には油山の西麓から派生した低丘陵がある。この丘陵は、干隈から飯倉にかけて狹小な谷を造りながら北へむかって長くハッカ状にのび、北端は丘陵に沿った細長い谷がはいり大きく又状に分岐している。飯倉A遺跡は、この又状に分岐した飯倉丘陵の西側丘陵の東斜面上にある。

飯倉丘陵を中心とする早良平野東縁部は、「占き塚多し、廟あり」や「野芥村には石窟廿五ヶ所あり」と貝原益軒著の『筑前國統風上記』に記され、多くの遺跡が古くから知られていた。本格的な発掘調査は1967（昭和42）の有田遺跡はじめより、旧石器時代から中世まで多くの遺跡が知られるに至っている。

旧石器時代の包含層や遺構は未検出であるが、尖頭器やナイフ型石器が出土したカルメル修道院遺跡や飯倉E遺跡が丘陵上に立地している。

縄文時代では、前期の曾畠式土器が出上した五ヶ村池遺跡のほか、飯倉E・G遺跡、エクゾノ遺跡などがある。また、室見川右岸の四箇遺跡や田村遺跡では早期から晩期の遺構が確認されており、次第に平野の沖積地へ拡大していく。

弥生時代になると、早良王墓として著名な吉武遺跡群を頂点として平野全域に急速に増加拡大していく。飯倉から干隈の丘陵上には、前期から中期の豪棺墓に細型銅劍と碧玉製管玉や素環頭鉄刀を副葬していた飯倉原遺跡と土塙墓に銅劍を副葬したカルメル修道院遺跡がある。後期には、木棺墓に小型方製鏡や鉄刀子を副葬した飯倉G遺跡がある。また、西方の有田遺跡で銅戈が、南方の東入部遺跡では銅劍・銅錐と鉄製武器が豪棺墓中に副葬されているが、室見川左岸の遺跡群とは質・量ともに大きな隔たりがある。

古墳時代では、集落遺跡は飯倉A・C・F・G遺跡や野芥遺跡等があり、丘陵上や平野部に拡がる。古墳は、首長墓として前期には前方後方墳の京の隈古墳が、後期には神松寺御陵古墳、柳林古墳の前方後円墳が丘陵上にある。後期の古墳群としては、北から飯倉古墳群、千隈古墳群、七隈古墳群が丘陵上にあるほか後背する西油山山麓には駄ヶ原、影塚、霧ヶ滝、重留、三郎丸古墳群等が点在している。

古代から中世にかけては、飯倉C・F遺跡で奈良時代から中世の住居址や掘立柱建物址が、飯倉G遺跡では奈良時代の鍛冶炉や土塙墓が調査されているが、遺跡の中心は田村遺跡や重留遺跡等の平野部に移ってゆく、丘陵上は生産や墳墓の地として利用されていくにすぎなくなる。

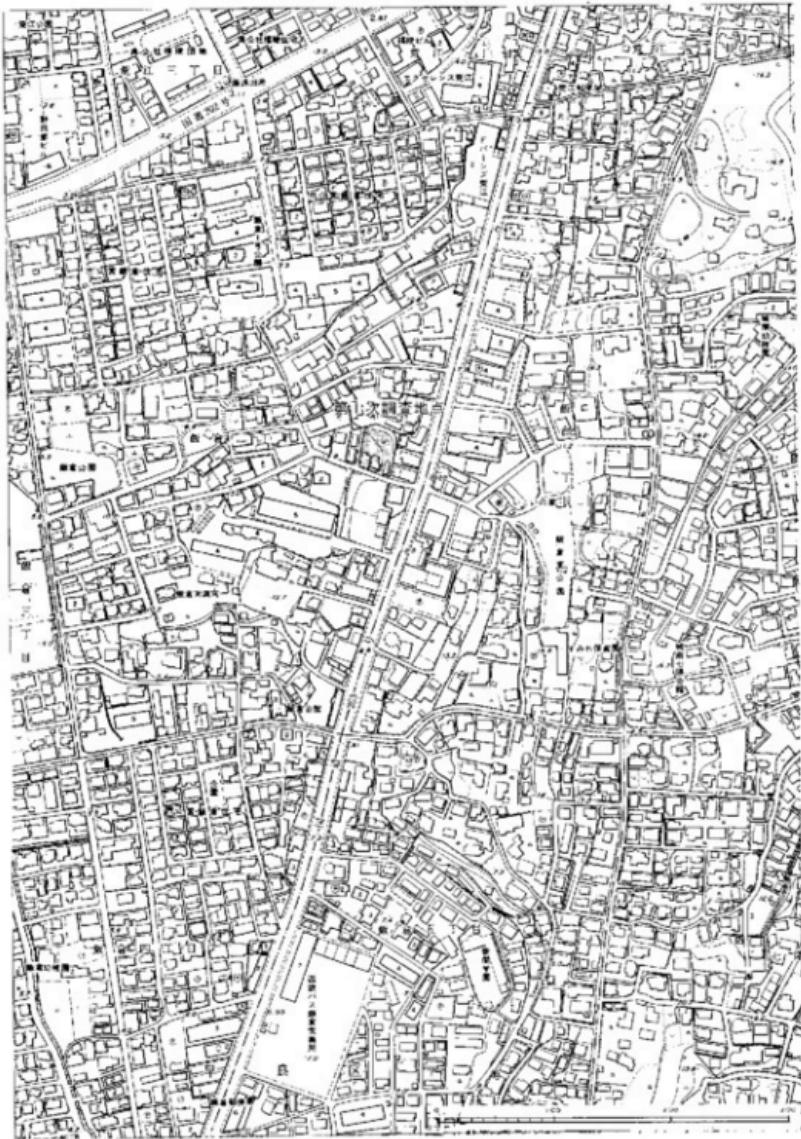


Fig. 2. 飯倉 A 造跡位置図 (1/5,000)

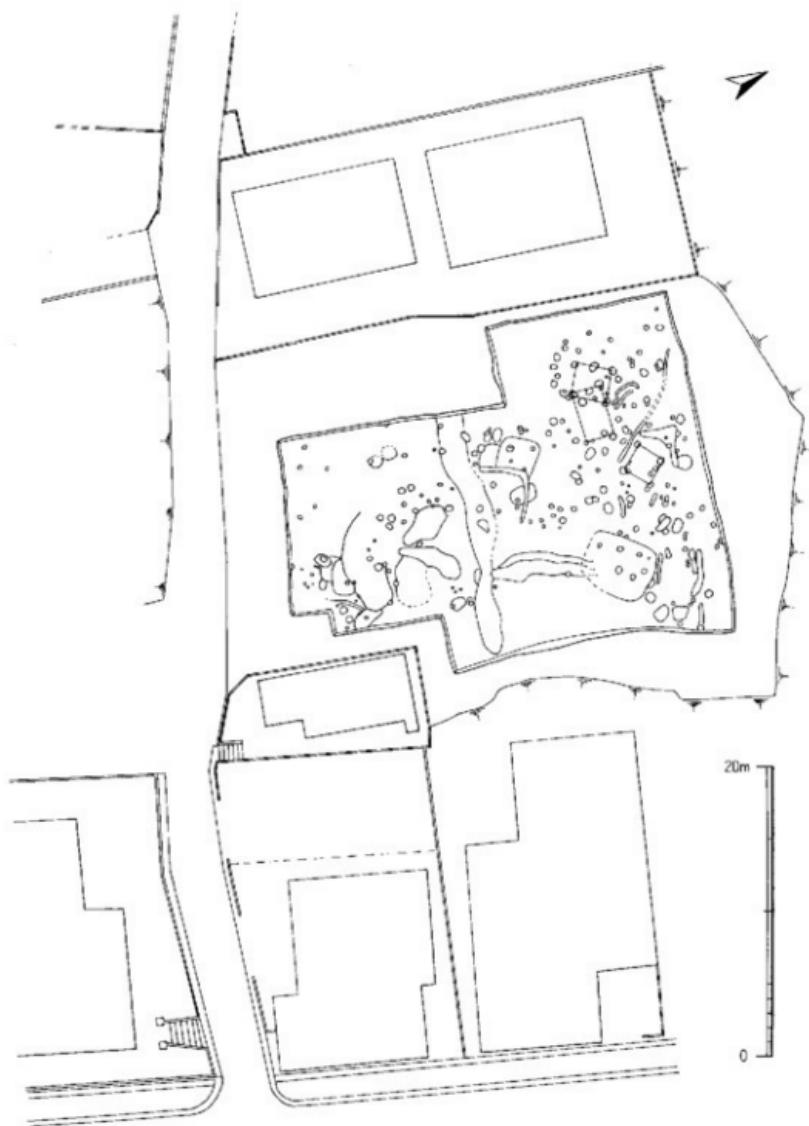


Fig. 3. 飯倉 A 遺跡現況図 (1/400)

II. 調査の記録

1. 調査の概要

飯倉遺跡群は、油山西麓から北へ長くのびる低丘陵上に並がる遺跡の総称であり、窓入する谷等によって便宜的に A ~ G の遺跡に区分されている。飯倉 A 遺跡は、この遺跡群北端の丘陵が細長い谷によって又状に分岐した西側丘陵上にある。

第 1 次調査地点は、この飯倉 A 遺跡の東側緩斜面上にあり、調査区の中央部には飯倉 B 遺跡とを隔てた谷へ向かう深い谷が窓入している。この幅 15m 程の深い谷上には緩斜面上から流入した遺物包含量が 20~60cm の厚さで堆積していた。遺構は、この遺物包含層上と包含層中および包含層を除去した地山面の 3 面で検出した。そのために発掘調査は、緩斜面と包含層上面の遺構を第 1 面の遺構群として調査し、続いて包含層中の遺構を第 2 面、包含層下を第 3 面の遺構群として調査した。各遺構の No. は、第 1 面を 01 から、第 2 面は 101 から、第 3 面は 201 から始まる各面の各遺構ごとに付した。

また、発掘調査は排水の場内処理により調査区を南北に 2 区分して実施した。そのため遺物包含層上にある調査区境界の遺構は不連続なものや消失したもののが多々あった。

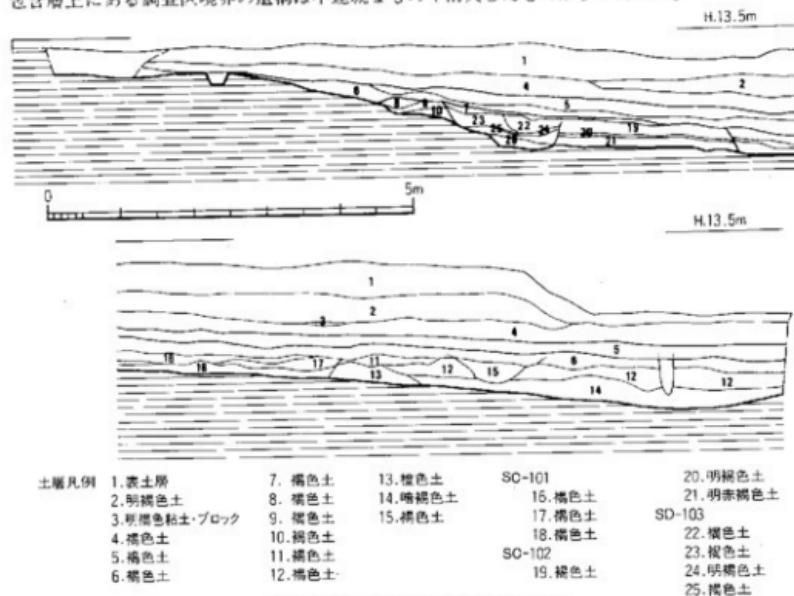


Fig. 4. 調査区東壁土層断面図 (1/80)

2. 第1面の調査

第1面では、堅穴住居址(1棟)、掘立柱建物址(3棟)、土壙(15基)と溝などの遺構を検出した。これらの遺構は丘陵の緩斜面と谷部に堆積した遺物包含層の上面で検出したものである。そのために遺構は調査区全域に亘って拡がるが、中央部に弯入する谷筋に沿って東流するSD-01を境にして北側にまとめて分布し、南側は浅い凹み状の不整形遺構等がうすく分布するにとどまる。

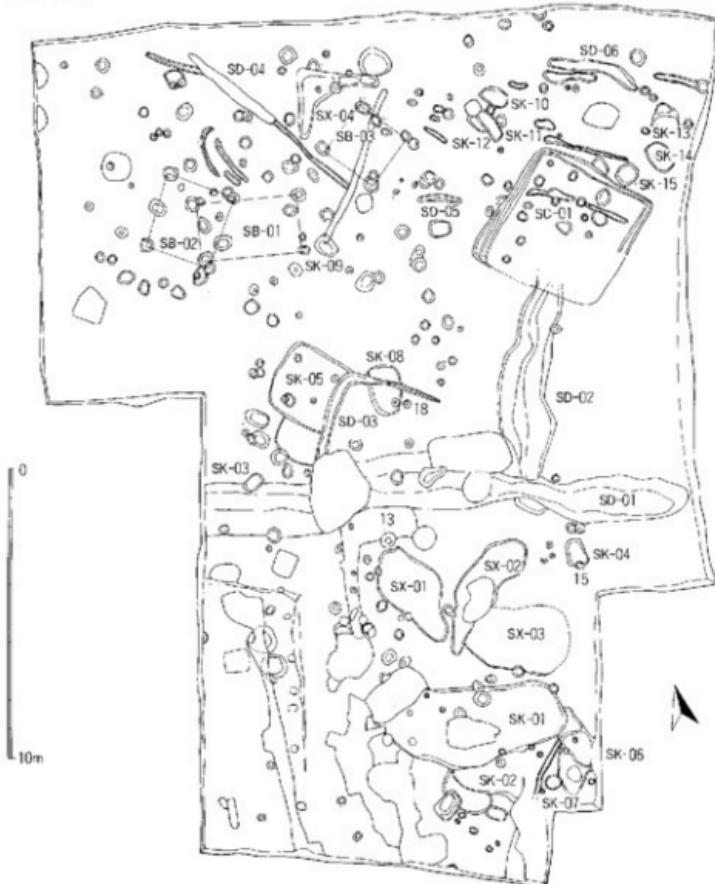


Fig. 5. 第1面遺構配置図 (1/200)

1). 壇穴住居址

第1面では、調査区の北東部で方形の壇穴住居址を1棟検出した。また、1×1間の建物址は住居址の主柱穴、矩形に曲がる浅い溝SD-03は住居址周溝の可能性が考えられるかいずれも明らかにしえなかつた。

SC-01 (Fig. 6, PL. 2)

調査区の北東部で検出した。住居址は南壁から南東壁にかけてが調査区の切り返しに際して消失し現存しないが、一辺が約4.6mの方形プランを呈する。急峻に立ち上がる壁面は深さ20~30cmを測り、壁下には周溝が巡る。また、北東壁側には壁から80~100cmほど中央寄りのところに溝があり、ベット状遺構を有した可能性が考えられる。床面は黒褐色土の混入したロームブロック上で固く踏みしめられていたが、谷筋にむかう南側ほど厚くなる傾向を示す。炉址は認められない。柱穴は径30~35cm、深さ15~30cmのピットが壁面にそって検出されたが、主柱穴は特定できなかつた。

遺物は弥生時代の甕や高杯片と上師器表片が少量出土しているのみで、時期については明確にはしえない。

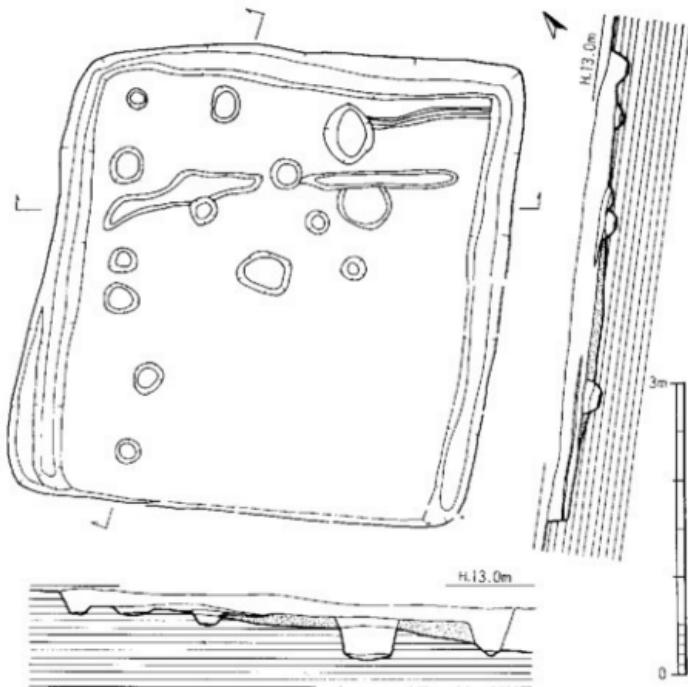


Fig. 6. SC-01実測図 (1/60)

2). 土 壤

第1面では、15基の土壙を検出した。平面プラン的には方～長方形のものと橢円形をなすものに分けられる。規模的には長軸が6mを越すSK-01を除いてはいずれも1～2mの範囲に納まるものであるが、その規模や形態的相違が時期差や機能的相違には繋がらない様である。また、その分布は谷上に堆積した遺物包含層上を除いた谷の縁辺に立地する傾向はあるものの比較的散漫な分布状況を示している。

SK-01 (Fig. 7・8・14, PL. 3)

調査区の南端部にある大型の土壙で、SK-02と06を切っている。平面プランは長軸674cm、短軸278cmを測る長橢円形を呈し、主軸方位をN-77°-Wにとる。壁高は15～25cmを測るが、丘陵の東緩斜面に立地しているために西側が浅く、東側がやや深くなる。駆面は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い凹レンズ状をなす。壙内からは中期後半から後期の弥生土器と土師器の壺や甕片が散乱した状態で出土した。

1は、玄武岩質の蛤刃石片である。刃部は両面よりやや規則に磨ぎだしている。身幅は6.5cm、身厚は3.0cmに復原できよう。現重量は177gである。

3は凸レンズ状底部に偏球形の胴部がつく点で、口縁部を欠く。胴部最大径は14.7cmを測る。胎土には粗砂粒が多く含み、焼成は良好。色調は淡黄褐色。4は器壁の厚い長胴腹の底部である。胴部は小さな丸底気味の底部からラップ状に開く。5は底径17.8cmを測る器台の底部である。外面には斜行する叩き目が残り、内面は刷毛目後にナデて仕上げている。胎土には小砂粒を多く含む。

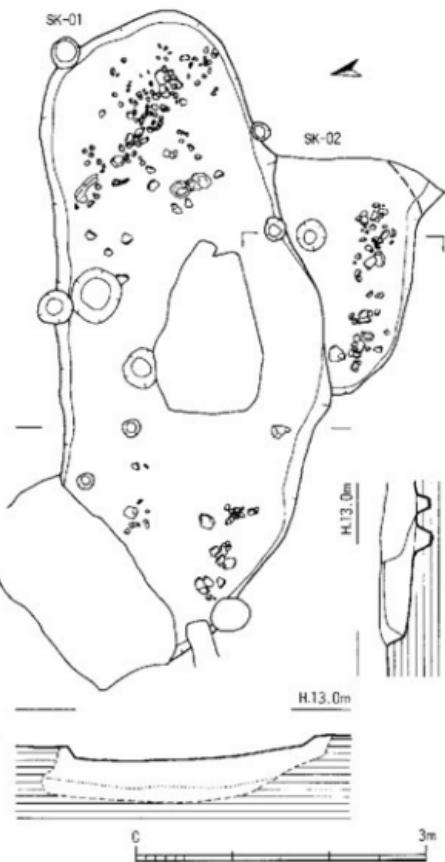


Fig. 7. SK-01・02実測図 (1/60)

SK-02 (Fig. 7・14, PL. 3)

調査区の南端部にあり、北側はSK-01によって切られている。北と東側が消失しているが、平面プランは長軸290cm、短軸210cm程の楕円形に復原できよう。主軸方位はN-75°-Wにとる。緩やかに立ち上がる壁面は深さ20cmを測り、断面形は逆台形をなそう。覆土中からは弥生土器と土師器片が少量出土している。

6は「く」字口縁の甌である。口縁部は短く外反し、胴部は肩の張りが弱い。調整は口縁部がヨコナデ、胴部はナデで仕上げるが内面には刷毛目が残っている。

SK-03 (Fig. 9)

調査区の中央部西端にある小型の土壙で南半部はSD-01と重複している。平面プランは長軸75cm、短軸46cm、深さ17cmの楕円形を呈し、N-60°-Eに主軸方位をとる。断面形は逆台形をなし、壁面は緩やかに立ち上がる。壇底から弥生土器と土師器の小片が出上している。

SK-04 (Fig. 9, PL. 3)

調査区の南東部に位置する小型の土壙で、ほかの土壙からやや離れた状況にある。平面形は長軸74cm、深さ31cmを測る隅丸長方形プランを呈し、主軸方位N-5°-Wにとる。壁面はやや急峻に立ち上がり、断面形は逆台形をなす。覆土中からは弥生土器と土師器片が少量出土している。

SK-05 (Fig. 9・10, PL. 3)

調査区の中央部に位置するやや大型の土壙で、東側はSD-03に切られている。平面形は一辺が260cm程の隅丸長方形になろう。壁面は深さ25cmで緩やかに立ち上がり、断面形は箱型を呈する。壇内からは弥生土器の甌片と土師器小片のほか打製石器が出土している。

2は無基の黒曜石製打製石器である。関部の一方を欠くが全長2.2cmを測り、漆黒色を呈する。

SK-06 (Fig. 9・14, PL. 3)

調査区の南東端部にあり、北西端はSK-01に切られている。平面プランは長軸230cm、短軸100cmの隅丸長方形になろう。主軸方位はN-24°-Wにとる。床面は北側が1段フラットな面を作ったのち壇底に至る所2段掘りの構造をなす。壁高は25cmを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土中からは弥生土器と土師器の甌片が出土している。

7は底径12.4cmを測る壺の脚部である。脚は細くのびた後に大きくラッパ状に開き、扇曲部に穿孔がある。調整は内外面ともに丁寧なナデ仕上げ。胎土は精良で、焼成は良好。色調は淡黄褐色。

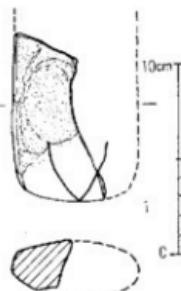


Fig. 8. SK-01出土石器
実測図(1/3)

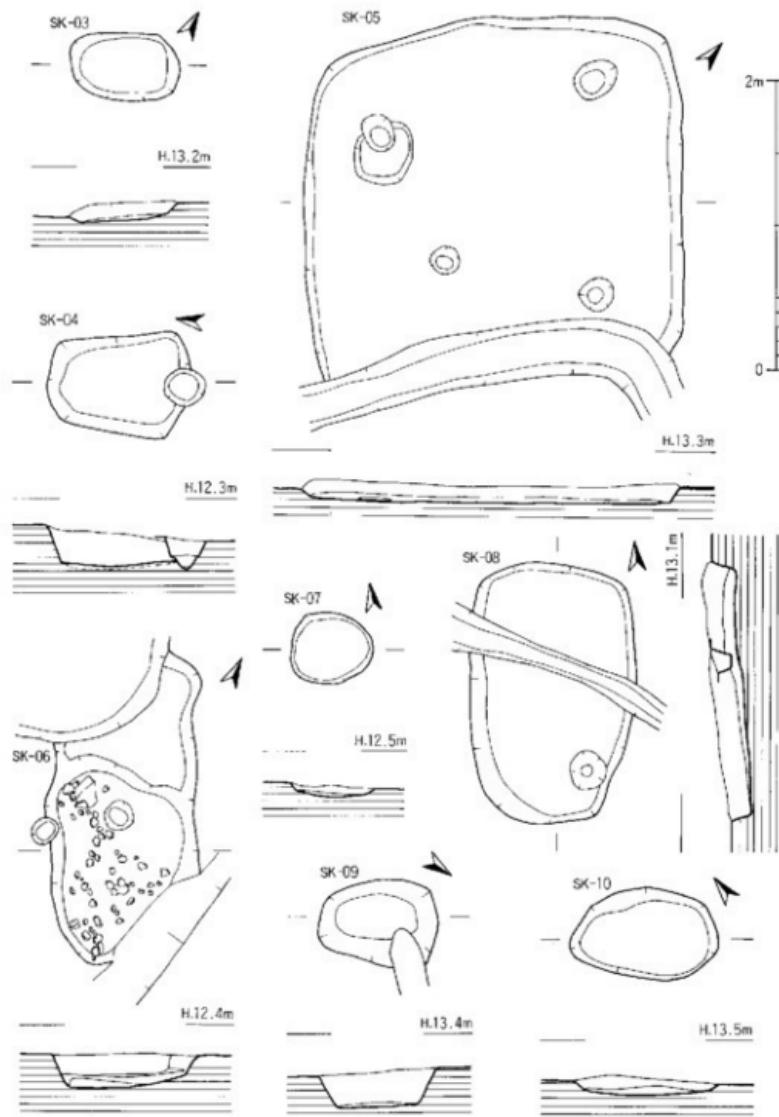


Fig. 9. SK-03~10実測図 (1/40)

SK-07 (Fig. 9)

調査区の南東端に位置する小型の上塙で、SK-02のすぐ東にある。平面プランは長軸57cm、短軸50cmのはば正円形をなし、深さは9cmと浅い。断面形は逆台形を呈する。

SK-08 (Fig. 9)

調査区の中央部に位置し、SD-03によって切られている。平面形は長軸182cm、短軸141cmを測る隅丸長方形プランを呈し、N-3.5°-Eに主軸方位をとる。壁高は32cmを測るが塙底は南側に向かって緩やかに傾斜している。壁面は垂直ぎみに立ち上がり、箱型の断面形をなす。

SK-09 (Fig. 9)

調査区の北西部に位置する小型の上塙で、SK-08の北方4mの距離にある。平面プランは長軸80cm、短軸60cmの楕円形を呈し、主軸方位をN-36.5°-Wにとる。やや急峻に立ち上がる壁面は深さ28cmを測り、断面形は逆台形をなす。場内からは弥生土器の小片がわずかに出土している。

SK-10 (Fig. 9)

調査区の北端部にあり、SK-11のすぐ北に位置する。平面プランは長軸103cm、短軸64cm、深さ14cmを測る楕円形をなし、主軸方位はN-54°-Wにとる。断面形は凹レンズ状をなし、壁面は緩やかに立ち上がる。腹土中からは弥生土器片がわずかに出土した。

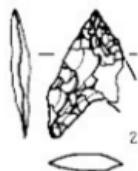


Fig. 10. SK-05
出土石器実測図
(1/1)

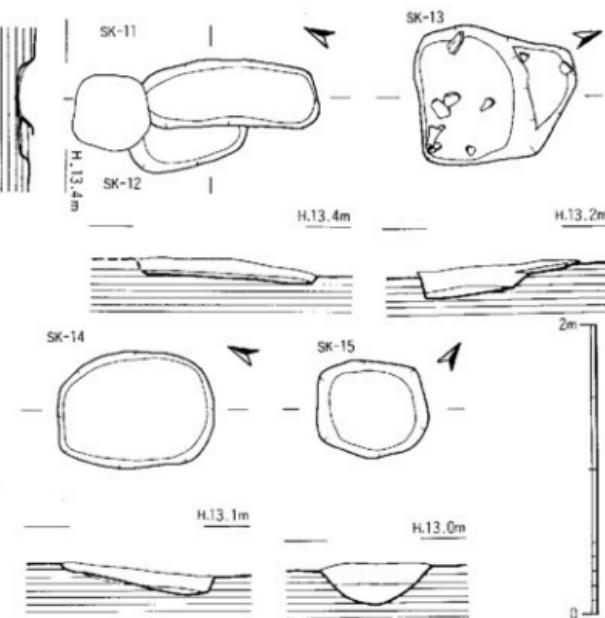


Fig. 11. SK-11~15実測図 (1/40)

S K-11 (Fig. 11)

調査区の北端部に位置する土壙で削平が著しい。北西端部は S K-11と重複し、これよりも新しい。平面プランは長軸125cm、短軸48cm、深さ16cmを測る隅丸長方形を呈し、N-21°-Wに主軸方位をとる。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は舟底状をなす。遺物は弥生土器片が少量出土した。

S K-12 (Fig. 11)

調査区の北端部に位置する小型の土壙で、東半部は S K-11によって切られている。平面形は長軸85cm、短軸50cm程の隅丸長方形プランになろう。主軸方位はN-30°-Wにとる。壁高は10cmと浅く、断面形は逆台形をなす。

S K-13 (Fig. 11)

調査区の北東端部にあり、S K-14のすぐ北東に位置する。平面プランは長軸113cm、短軸97cmで北壁側が三角形状にやや張り出した不整方形をなし、主軸方位をN-72.5°-Wにとる。土壙は三角形状に張り出した北壁側に1段フラット面を作ったのちに緩傾斜して壙底に至るいわゆる2段握りの構造をなす。壁面は急峻で壁高は23cmを測る。断面形は箱型をなす。覆土には炭片と焼土が混入し、遺物は弥生土器の腹片が出土している。

S K-14 (Fig. 11)

調査区の北東端部にあり、S K-13と15の中間に位置する。平面プランは長軸107cm、短軸79cmを測る隅丸長方形を呈し、N-21°-Wに主軸方位をとる。壁高は23cmで断面形は箱型をなし、床面は南側に大きく傾斜する。覆土は砂混入の褐色土で、遺物は出土していない。

S K-15 (Fig. 11)

調査区の北東端にあり、S K-13-15の一群中で最も南端に位置する。平面形は長軸77cm、短軸67cmの隣丸方形プランを呈し、主軸方位N-62°-Eにとる。深さ28cmを測る壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は舟底状をなす。

遺構	法量(長軸×短軸×深さ)	主軸方位	平面形	断面形	出土遺物
S K-0 1	674×278×26	N-7°-W	長楕円形	四レンズ状	弥生土器、土師器、帶織石斧
S K-0 2	240 : $\alpha \times 145 + \alpha \times 20$	N-75°-W	楕円形	逆台形	弥生土器、土師器
S K-0 3	75×46×17	N 60°-E	楕円形	逆台形	弥生土器、土師器
S K-0 4	97×74×31	N-5° W	隅丸長方形	逆台形	弥生土器、土師器
S K-0 5	220 : $\alpha \times 260 \times 25$	N-45°-W	隅丸方形	船型	弥生土器、土師器、打織石斧
S K-0 6	215+ $\alpha \times 100 \times 25$	N-24°-W	隅丸長方形	2段握り逆台形	弥生土器、土師器
S K-0 7	57×50×9	N-80°-W	円形	四レンズ状	弥生土器
S K-0 8	182×114×32	N-3.5°-E	隅丸長方形	箱型	
S K-0 9	80×60×28	N 36.5°-W	楕円形	逆台形	弥生土器
S K-1 0	103×64×14	N-54°-W	楕円形	四レンズ状	弥生土器
S K-1 1	125×48×16	N-21°-W	隅丸長方形	舟底状	弥生土器
S K-1 2	85×35+ $\alpha \times 10$	N 30°-W	隅丸長方形	逆台形	弥生土器
S K-1 3	113×97×23	N-72.5°-W	不整方形	船型	弥生土器、土師器
S K-1 4	107×79×23	N-21°-W	隅丸反方形	船型	弥生土器
S K-1 5	77×67×28	N 62°-E	隅丸方形	舟底状	弥生土器、須恵器

Tab. I 第1面土壙一覧表

3). 掘立柱建物址

第1面では、丘陵の南緩斜面にあたる調査区の北西部で3棟の掘立柱建物址を検出した。建物規模は、いずれも 1×1 間、 1×2 間と小規模なものである。また、検出した柱穴の中には明瞭な柱痕跡を残すものもあったが、建物址としてはまとめえなかった。

SB-01 (Fig.12, P.L. 3)

調査区の北西部に位置する東西棟の建物址である。西半部はSB-02と重複し、南西の隅柱はSB-02の南東隅柱に切られている。建物規模は、桁行長3.5m、梁行長2.0mの 1×1 間であるが、桁行は柱間1.75mの2間になることも考えられる。柱穴は30~50cmの楕円形をなす、深さは25~55cmを測る。北西隅柱を除く柱穴からは直徑15cm程の柱痕跡が確認された。覆土中からの遺物は土器小片が出土するのみで時期は明確にはしがたい。

SB-02 (Fig.12, P.L. 3)

調査区の北西部にある 1×2 間の東西棟の建物址である。東半部はSB-01と重複し、これよりも新出する。建物規模は桁行全長2.6mで、柱間は北側柱は1.3mであるが、南側柱の柱間は1.6m、1.0mになる。梁行長は2.4mで全体的にはほぼ矩形をなす。柱穴は一歩が40~60cmの方形をなし、深さは20~30cmを測る。柱穴内からは土器小片がわずかに出土した。

SB-03 (Fig.12, P.L. 3)

調査区の北端部にある 1×1 間の建物址で、SB-01のすぐ北東に位置する。建物規模は、桁行長・梁行長ともに2.0mの矩形をなす。柱穴は径30~50cmのしっかりした楕円形をなし、深さは20~25cmを測る。覆土中からは遺物がほとんど出土していないために時期は不明である。

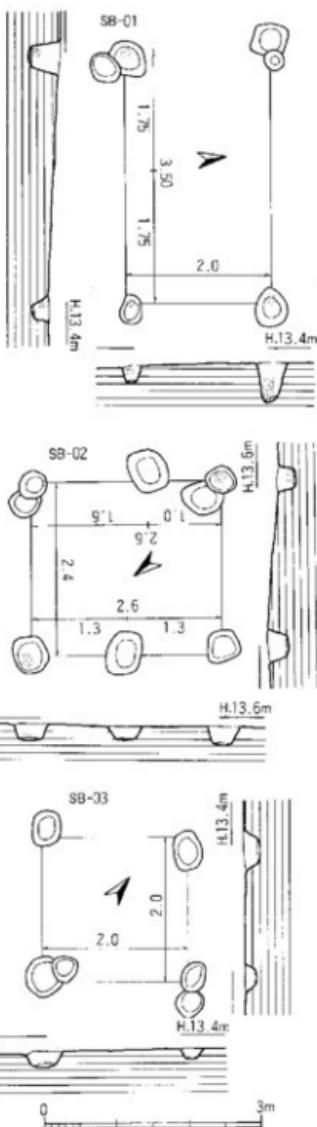


Fig. 12. SB-01~03実測図 (1/8C)

4). 溝遺構

第1面では大小合わせて6条の溝遺構を検出した。この断面が曲がるSD-03が竪穴住居址周溝の可能性を残し、SD-01・02は深い谷を区画する状況をなすなど集落址との関わりが想定される。

SD-01 (Fig. 13, PL. 1)

調査区の中央部を谷筋に沿って東流する溝で、調査区東端で終息する。東部ではSD-02と重複し、これよりも新しい。現長は14.7m、溝幅は最大部で2m、深さは15~30cmを測る。覆土中からは弥生土器の高環のほか土師器片等が少量出土している。

SD-02 (Fig. 13)

調査区の東端部にある南北方向の溝で、南端はSD-01と直交している。全長は約7.5mである。溝の最大幅は2mで、西側はフラット面を作ったのちに溝底に至る。深さは25cmを測り、断面形は深いU字状をなす。遺物は弥生土器の甕と高環と土師器高環等が出土している。

SD-03 (Fig. 13・14, PL. 3)

調査区のほぼ中央部に位置する「く」字状にのびる溝で、SK-05と08を切っている。長さは西側が3~4m、北側が3.35mで、溝幅は20~35cmを測る。深さは10~15cmで断面形は深いU字状をなす。矩形内にはピットもあり、竪穴住居址の周溝の可能性も考えられる。溝の屈曲部からは土師器の甕が出土している。

8は口径12.8cmを測る土師器の甕である。口縁部はやや直口気味に短く外反し、肩の張りの弱い球形の胴部がつく。調整はナテで仕上げ、胴部外面には煤の付着痕がある。胎土には粗砂粒を多く含み、色調はくすんだ褐色を呈する。

SD-04 (Fig. 13)

調査区の北西端部にあり、北西から南東へむかってはしる。全長は8.5mで、北側に小さく膨らんでいる。溝幅は25cm、深さは10cmを測り、断面形は深いU字状をなす。

SD-05 (Fig. 13)

調査区の北部に位置する短い溝である。長さは2.1m、深さは15cm、溝幅は20cmを測る。覆土は褐色土で、遺物は出土していない。

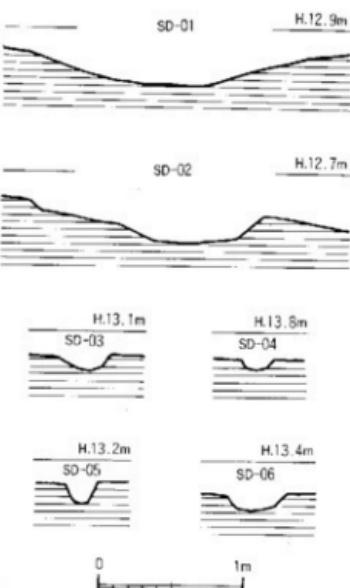


Fig. 13. SD-01~06断面図(1/40)

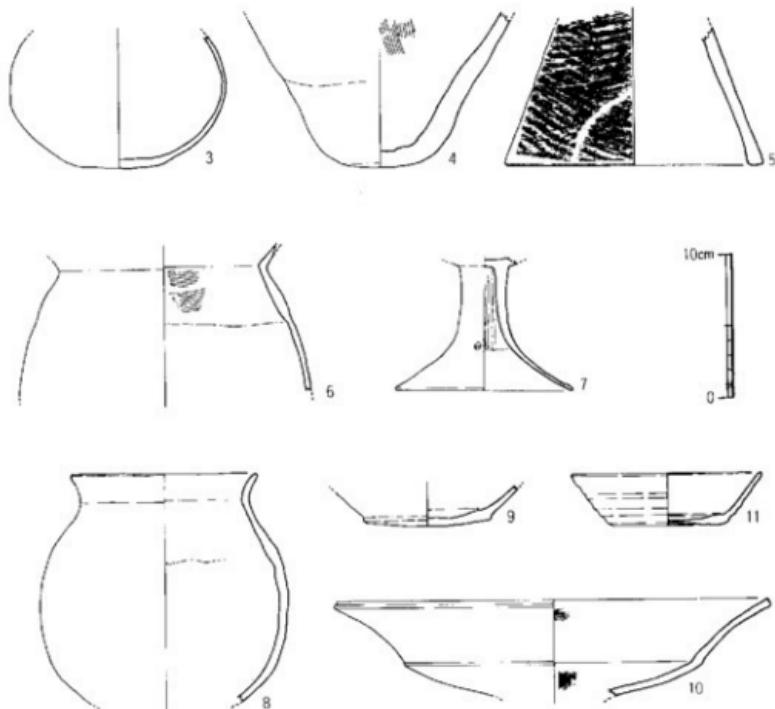


Fig. 14. 第1面遺構出土土器実測図 (1/4)

SD 06 (Fig. 13)

調査区の北東端部にある溝で、東側は小さく屈曲している。全長は3.2m、溝幅は35cmを割る。深さは12cmで、断面形は逆台形をなす。覆土は明褐色土である。

5). その外の遺構と遺物

第1面では、竪穴住居址等のほかに不定形をした凹み状の遺構やPitがあり、これらの遺構からも遺物が出土している。殊にPitは掘立柱建物址としてまとまらなかったものであり建物址の時期決定にも参考となろう。

出土遺物 (Fig. 14、PL. 9)

9はSP-13から出土した底径8.8cmの鉢である。反り気味の底部は小さな段を作つて球形の胴部へとづく。10はSP-15出土の高环で、口径は30cmを測る。环部は体部下半で屈曲した後に大きく外反して開く。胎上は精良で灰褐色を呈する。11はSP-18出土の土師器杯である。口径13.2cm、底径7.6cm、器高3.6cmを測る。底部は小さな上げ底となり、体部は直線的に開く。胎土はやや粗く、焼成は良好。色調は淡赤茶色を呈する。

3. 第2面の調査

第2面では、堅穴住居址2棟、孤立柱建物址1棟、土壌18基と溝等の遺構を検出した。これらの遺構は調査区の中央部に弯入した浅い谷の緩斜面と谷に堆積した遺物包含層の中位に開削されたものである。このためにこれらの遺構群は谷上を主体とする狭小な範囲内に限って分布する。また、遺構の中には谷筋に沿って開口部に流れる溝状のものや不定形のものがあるが、いずれも浅く判然としないために不明遺構として取り扱った。

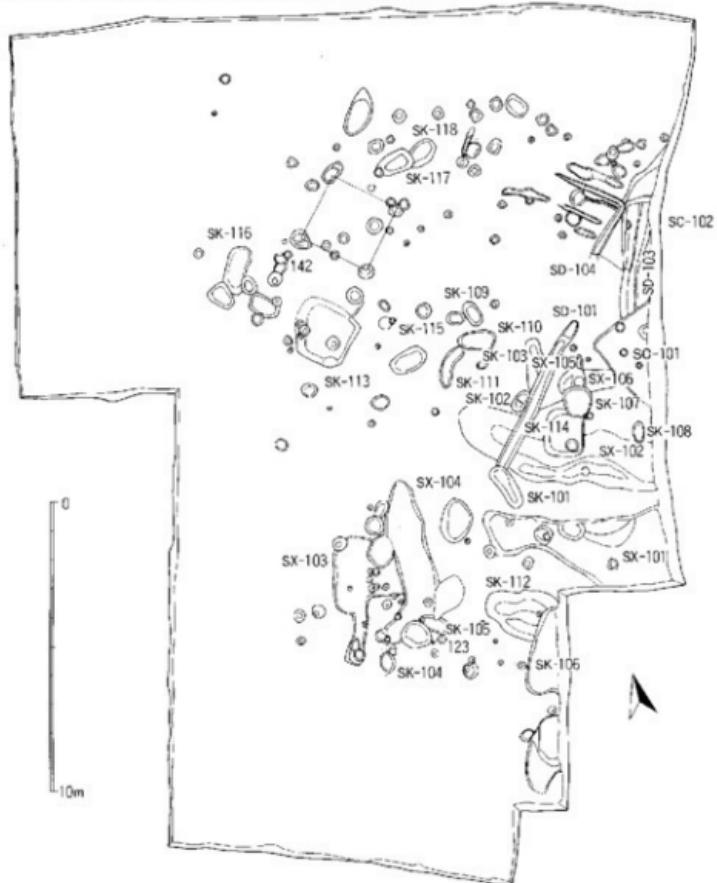


Fig. 15. 第2面遺構配置図 (1/200)

1). 竪穴住居址

第2面では、調査区の中央部東端で2棟の竪穴住居址を検出した。住居址は浅い谷の埋没後に丘陵の南側緩斜面を段状に造成して開削されたものである。しかし、いずれもその大半が調査区外に抜がっているために全容は明らかにしえなかった。

SC-101 (Fig. 16・18・21・25, P.L. 4・5)

調査区の中央部東端にある住居址で、SC-102のすぐ南に位置する。調査区東壁の七層観察によれば、SC-102よりも新出する。住居址は西隅部を検出したに過ぎないために全容は明らかでないが、一辺が4~5m程の方形プランをなすものであろう。壁高は15~25cmを測り急峻に立ち上がる。床面には随所に3~5cmの厚さでロームブロックを突き固めて平坦に仕上げている。また、中央部の北壁寄りには壁面が赤く焼けた径50cmほどのピットがあり、塙内と北壁側には灰層がうすく堆積していた。炉址として使われたものであろう。柱穴は西壁に沿って2ヶ所あるが、P-1が北西の隅柱になろう。遺物は壁際に沿って手捏ね土器等や鉄津(1)が出土しているが、量的には少ない。

21は口径6.6cm、器高4.6cmを測る手捏ね土器である。半卵形をなす体部は器壁が厚く、口縁部は小さく直口する。内外面ともに指頭押圧痕が残り、淡灰褐色を呈する。胎上は細~粗砂粒を多く含みやや粗い。

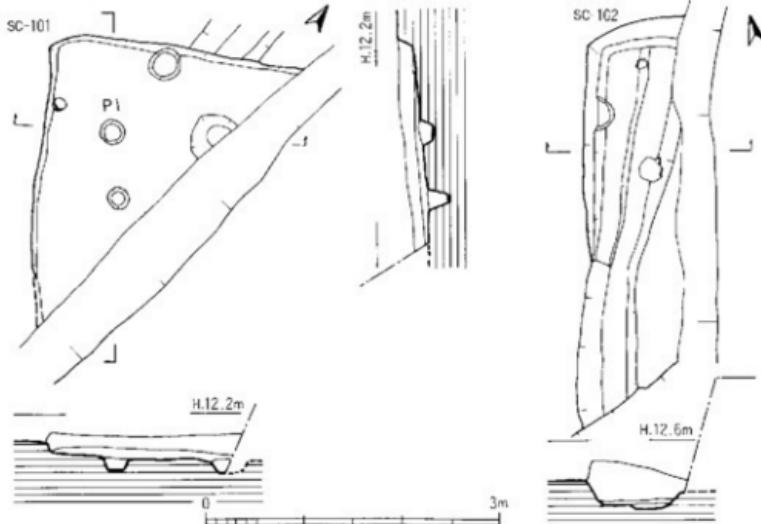


Fig. 16. SC-101・102実測図 (1/60)

14は刀子の茎から刃基部片であろう。現長は3.6cmを測り一部に木質が残る。

18は安山岩質の無茎石鏃である。全長は2.6cm、幅は2.0cmを測り、三角形錐的形状を示す。断面形は菱形をなす。

S C-102 (Fig. 16, P L. 5)

調査区の中央部南側にある生居社で南半部はS C-101に、西壁際はS D-103によって切られている。その大半が調査区外に並がっているために全容は判然としないが、S C-101に近い一辺が4~5m程の矩形を呈するものであろう。壁高は緩斜面側の北壁で45cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。壁下には周溝は巡らない。住居社の遺存範囲が狭いために遺物はほとんど出土しておらず、明確な時期は決しがたい。

2). 土 壤

第2面では全てで18基の土壙を検出した。その分布は第2面の遺構を検出した谷に堆積した遺物包含層上と緩斜面全域にわたり、特定のまとまりは示さない。平面的には方形~円・橢円形プランを呈するが、その形状等の違いによる時間や機能的相違は即断しがたい。しかし、塙内から出土する遺物はいずれも小片で少ないと、弥生時代後期から古墳時代初めのものでこの間に求めることができよう。

S K-101 (Fig. 17・18, P L. 6・7)

調査区のはば中央部東側に位置する土壙で、S D-101の南側を切っている。平面形は長軸158cm、短軸60cmの橢円形プランを呈し、N-17°-Wに主軸方位をとる。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は37cmを測る。塙底には凹凸があり、瓢形の形状を示す。断面形は舟底状をなす。塙内からは弥生式土器と土師器の小片が少量出土した。

番 標	法 景(長軸×短軸×深さ)	主 軸 方 向	平 面 形	断 面 形	出 上 遺 物
S K-101	158×60×37	N-17°-W	椭 圆 形	舟 底 状	
S K-102	80×47×30	N-50.5°-E	椭 圆 形	2段盛り逆台形	弥生土器、土師器
S K-103	117×63+α×42	N-6°-W	长 方 形	逆 台 状	
S K-104	110×95×35	N-58°-W	不整 圆 形	逆 台 形	弥生土器、滑石製石錠
S K-105	106×57×26	N-30.5°-W	椭丸長方 形	逆 台 形	
S K-106	316×120+α×36	N-25.5°-E	椭丸長方 形	逆 台 形	弥生土器
S K-107	104×100×31	N-4°-W	椭丸方 形	逆 台 形	弥生土器、土師器、敲き石
S K-108	73×40×26		椭 圆 形	舟 底 状	弥生土器、土師器
S K-109	92×54×29	N-22°-W	椭丸長方 形	舟 底 状	弥生土器?
S K-110	136×77×21	N-72°-W	不整端円 形	逆 舟 底 形	弥生土器?
S K-111	156×45×16		弓 状 形	逆 戟 形	弥生土器?
S K-112	198+α×176×47	N-53°-W	不整端円 形	2段盛り逆台形	弥生土器?
S K-113	2.3×208×29	N-50°-W	不 正 方 形	凹レン尖状	弥生土器?
S K-114	163×137×40	N-21°-E	椭丸方 形	逆 台 形	弥生土器、土師器、須恵器
S K-115	132×74×28	N-76°-E	椭 圆 形	逆 台 形	
S K-116	158×78×20	N-29°-E	椭丸長方 形	逆 台 形	
S K-117	122×77×37	N-78°-E	椭丸長方 形	逆 台 形	弥生土器? 上師器、須恵器
S K-118	93+α×75×39	N-60.5°-E	椭 圆 形	逆 台 形	

Tab. 2 第2面土壙一覧表

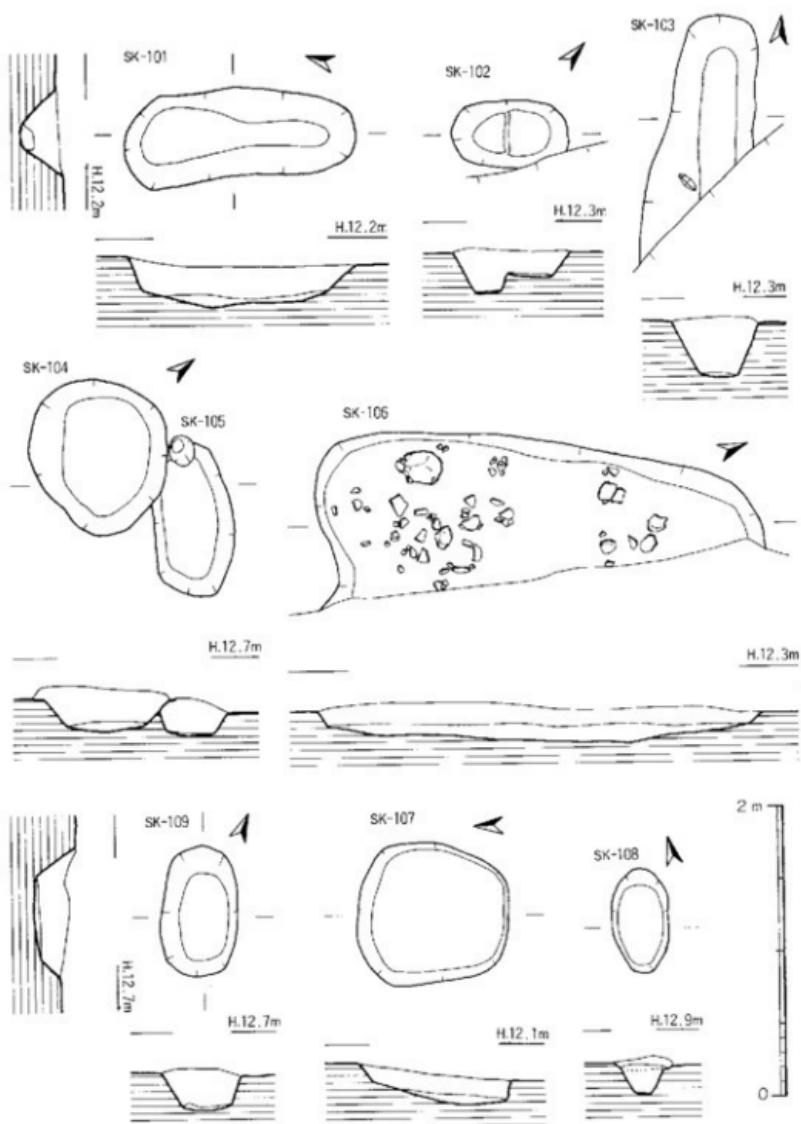


Fig. 17. SK-101~109実測図 (1/40)

S K - 102 (Fig. 17, P L. 6 · 7)

調査区の中央部東側にある小型の土壙である。北東端は S D - 101 と重複し、これよりも前出する。平面プランは長軸 80cm、短軸 47cm の橢円形を呈し、主軸方位を N - 50.5° - E にとる。壁面はやや緩やかに立ち上がり、壁高は 30cm を測る。壙底より 15cm 上面にはフラットな面を作り、断面形は 2段掘りの逆台形をなす。

S K - 103 (Fig. 17 · 19, P L. 6 · 7)

調査区の中央部東側にある土壙で、S K - 102 東に隣接して位置する。南端部は S D - 101 によって切られている。平面プランは長軸 220cm、短軸 70cm の長方形に復原できよう。主軸方位を N - 6° - W にとり、深さは 31cm を測る。壁面はやや緩く立ち上がり、断面形は逆台形をなす。遺物は上壙の南側上面からは滑石製の石錘が出土したほか弥生式土器の小片が少量ある。

16 は滑石製の石錘である。石材を粗削りしたのちに磨きをかけて整形し、横・縦の順に縦掛けの凹を穿っている。一端部を欠くが、横凹線は 4 条であろう。現長 14.3cm、幅 5.2cm、重さ 427g を測る。

S K - 104 (Fig. 17)

調査区の南側に位置する土壙で、北東側は S K - 105 を切っている。平面形は長軸 110cm、短軸 95cm の不整円形プランをなし、主軸方位を N - 53° - W にとる。緩やかに立ち上がる壁面は深さ 31cm を測る。断面形は逆台形をなし、壙底は浅い凹レンズ状をなす。

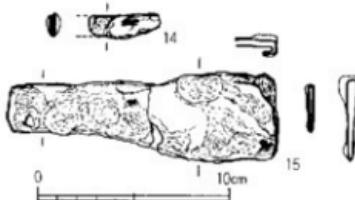


Fig. 18. SC-101 · SK-101
出土鉄器実測図 (1/3)

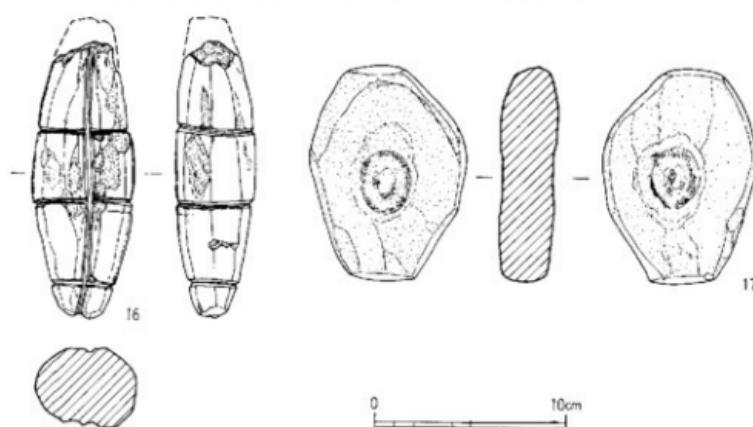


Fig. 19. SK-103 · 106出土石器実測図(1/3)

SK-105 (Fig. 17)

調査区の南側に位置する土壙で、西端部は SK-104 に切られて消失している。平面プランは長軸 106cm、短軸 57cm の隅丸長方形を呈し、N-30.5°-W に主軸方位をとる。深さは 26cm を測る。壁面は、やや急峻に立ち上がり、断面形を逆台形をなす。壙底は浅く凹んでいる。壙内からは弥生式土器片が少量出土している。

SK-106 (Fig. 17・19・25, P L. 6)

調査区の南東端部に位置する大型の土壙で、SK-105 の東 3 m の距離にある、北西側は SK

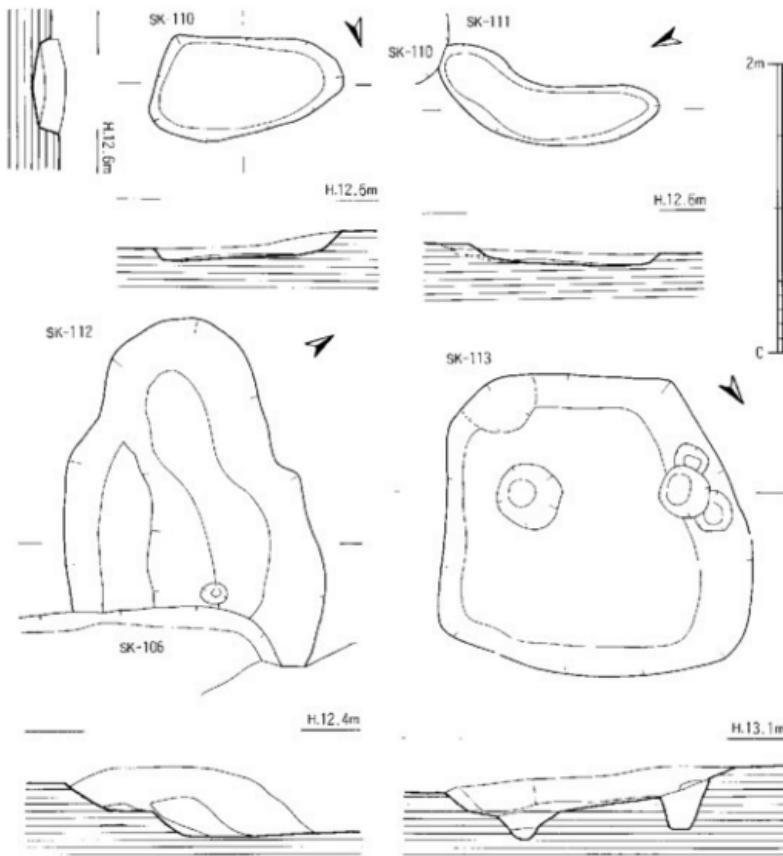


Fig. 20. SK-110~113実測図 (1/40)

—112と重複し、これより新しい。平面プランは長軸310cm、短軸約200cmの隅丸長方形になろう。主軸方位はN—25.5°—Eにとる。深さ26cmを測る壁面は緩やかに立ち上がる。断面形は逆台形を呈するが、壙底は渉い凹レンズ状をなす。壙内からは敲き石のはか弥生土器の壺・甕と土師器の壺や壺片が比較的まとまって出土している。

22は口径13.0cm、器高3.8cmの土師器壺である。体部は内窓気味に立ち上がり、口縁部は小さく直口する。胎土には小砂粒を含み、淡茶色を呈する。焼成は良好。23は小さな丸底に偏球形の鶴部がつく土師器壺である。調整はナテで仕上げるが、底部内面には竈状工具痕が残る。胎土は精良で、焼成は良好。色調はくすんだ茶色。

17は全長11.2cm、幅8.0cm、厚さ2.9cmの敲き石である。中央部は敲打による凹みがあり、両端部には敲打面が残る。重さは407g。

S K-107 (Fig. 17, P.L. 6)

調査区の中央部東端部にある土壙で、SK-114と重複し、これよりも新出する。平面形は長軸104cm、短軸100cmを測る隅丸方形プランを呈し、N—4°—Wに主軸方位をとる。壁面は北壁が緩やかな外は急峻に立ち上がり、断面形は直んだ逆台形をなす。壁面は北壁が緩やかなほかは急峻に立ち上がる。壁高は21cmを測り、壙底は南側が浅く凹む。壙内から弥生土器の壺や壺片のほか土師器壺片が出土している。

S K-108 (Fig. 17, P.L. 6)

調査区の中央部東端に位置する小型の土壙で、SK-114の東方約2mの距離に位置する。平面形は長軸73cm、短軸40cmの楕円形プランを呈し、深さは26cmを測る。主軸方位はN—14.5°—Eにとる。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は舟底状をなす。

S K-109 (Fig. 17)

調査区の中央部にあり、SK-110のすぐ北側に隣接して位置する。平面プランは長軸92cm、短軸54cmを測る小型の隅丸長方形を呈し、N—22°—Wに主軸方位をとる。深さ29cmを測る壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は舟底状をなす。

S K-110 (Fig. 20)

調査区の中央部北寄りに位置する。南西端はSK-111と重複し、これよりも新しい。平面プランは長軸136cm、短軸77cmの不整楕円形を呈し、主軸方位をN—72°—Wにとる。深さ21cmを測る壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台

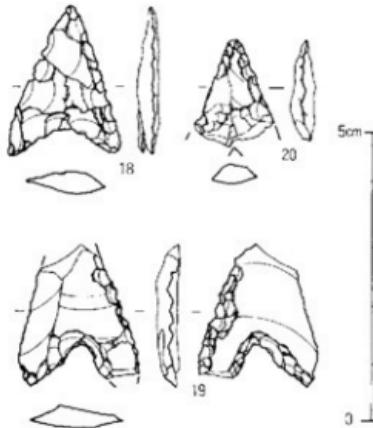


Fig. 21. 第2面遺構出土石器実測図 (1/1)

形をなす。

SK-111 (Fig. 20)

調査区の中央部にある不整形の土壌で、北東端はSK-110に切られている。法量は長軸155cm、短軸45cm、深さは160cmを測り、平面形は北側が弧状に膨らんだ弓状をなす。断面形は浅い逆台形をなす。

SK-112 (Fig. 20)

調査区の南東端に位置する大型の上塙で、東半部はSK-106に切られている。平面プランは長軸約310cm、短軸176cmの不整橢円形に復原できよう。土壌は南側に幅約35cmのフラット面を作ったのちに15cmほど下がって塙底に到る2段掘りの構造をなす。壁面は緩やかに立ち上がり、検出面から塙底までは47cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

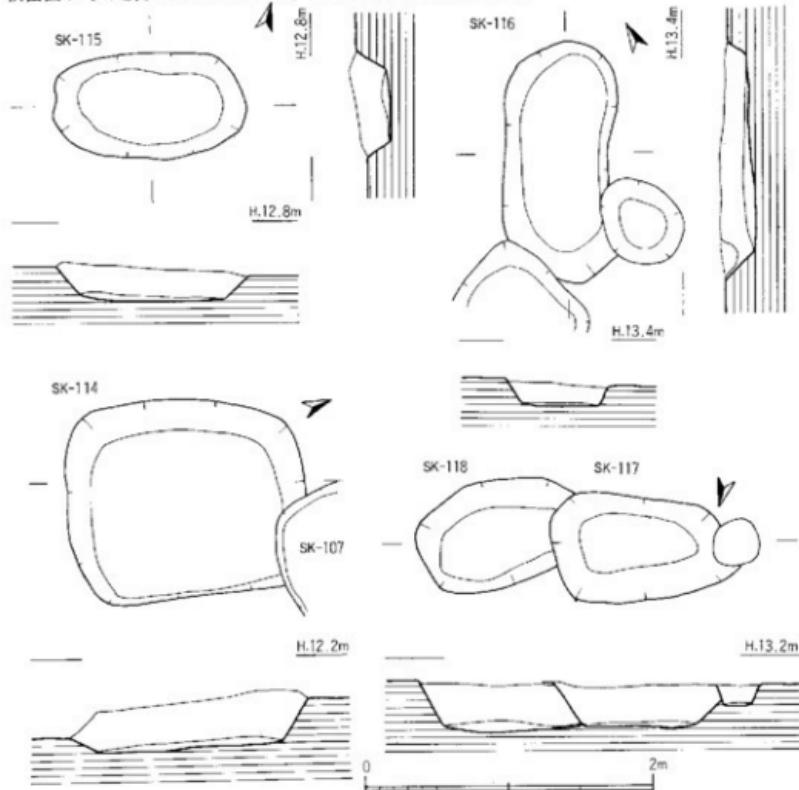


Fig. 22. SK-114-118実測図 (1/40)

S K-113 (Fig. 20, P L. 6)

調査区の北西部に位置し、S K-115の北西方1.5mの距離にある。平面形は長軸213cm、短軸150~215cmの不整形を呈し、主軸方位をN-50°-Wにとる。壇内中央には短軸に沿って径35~40cm、深さ20~35cmの柱穴が2本並ぶ。深さ29cmを測る壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は凹レンズ状をなす。覆土中からは弥生土器の壺・甕と器台片のほか土師器と須恵器片が出土している。

S K-114 (Fig. 22·25, P L. 6)

調査区の中央東端部にある方形の土壙で、北東端はS K-107に切られて消失している。平面形は長軸163cm、短軸137cmを測る隅丸方形プランを呈し、N-21°-Eに主軸方位をとる。深さ40cm測る壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形をなす。壇底には小さな凹凸があり、南側に緩く傾斜する。

24は甕の口縁部で、口径は26cmを測る。大きく「く」字状に外反する口縁部に張りの弱い長めの胸部がつくものであろう。内外面ともに刷毛仕上げ調整を施す。胎土は粗く小~粗砂粒を多く含む。色調は灰褐色を呈す。

S K-115 (Fig. 22, P L. 7)

調査区のはば中央部にあり、S K-111のすぐ西に隣接して位置する。平面プランは長軸132cm、短軸74cm、深さ28cmの楕円形をなし、主軸方位をN-76°-Eにとる。断面形は逆台形を呈し、壁面は緩やかに立ち上がる。

S K-116 (Fig. 22, P L. 7)

調査区の北西端に位置し、S K-113の北西方2mの距離にある。平面形は長軸158cm、短軸78cmの隅丸長方形をなし、N-29°-Eに主軸方位をとる。緩やかに立ち上がる壁面は深さ20cmを測り、断面形は逆台形をなす。

S K-117 (Fig. 22, P L. 7)

調査区の北端部に位置する土壙で、東側小口はS K-118と重複し、これより新出する。平面形は長軸122cm、短軸77cm、深さ37cmを測る隅丸長方形プランを呈し、主軸方位をN-78°-Eにとる。壁面は緩やかに傾斜して立ち上がり、断面形は逆台形をなす。覆土は褐色土で、遺物は出土していない。

S K-118 (Fig. 22, P L. 7)

調査区の北端部に位置し、南西側小口部はS K-117によって切られている。平面プランは長軸120cm、短軸75cmの楕円形になろう。主軸方位はN-60.5°-Eにとる。壁高は39cmで緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。覆土は褐色土であるが、壇底近くは暗茶褐色ぎみになる。

3). 挖立柱建物址

第2面では、調査区の中央部に寄入する浅い谷の南西緩斜面で、 1×1 間規模の掘立柱建物址を1棟検出した。建物としては単一の最小規模のもので集落群の構成等は明らかでない。また、検出した柱穴の中には明瞭な柱痕跡を残すものもあったが、建物址としてはまとめえなかった。

SB 101 (Fig. 23)

調査区の中央部北寄りに位置して検出した 1×1 間の建物址である。柱間は東西方向が 2.4m 、南北方向が 2.5m を測るほぼ矩形をなす。柱穴は径 $45\sim 65\text{cm}$ の円～楕円形を呈し、深さは $35\sim 45\text{cm}$ を測る。また、P1とP3では底面にまで達している直径 15cm 程の柱痕跡が確認された。柱穴内からは遺物がほとんど出土していないために建物址の構築時期は明確にはしがたい。

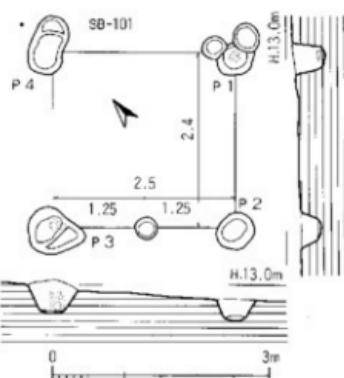


Fig. 23. SB-101実測図 (1/80)

4). 溝遺構

第2面では調査区の中央部東寄りで南北方にはしむ2条の溝を検出した。しかし、いずれの溝も竪穴住居址や土壤等との関係やその機能等については判然としない。

SD-101 (Fig. 21・24・25, P.L. 4・7)

調査区の中央部東寄りに位置する溝で、南端はSK-101によって切られている。溝は北東方から南西方へ一直線に伸び、長さは 6m を測る。溝幅は $40\sim 50\text{cm}$ 、深さは 30cm を測る。壁面はやや緩やかに立ち上がり、断面形は舟底状をなす。溝の上～中位にかけては弥生時代後期の壺と甕片が一括して投棄されていたほか鉄鏃と打製石鏃も出土した。

25～27は鉢である。25は口径 12.8cm 、器高 8.9cm を測る。口縁部は丸底ぎみの底部からストレートに立ち上がる。胎土は精良で焼成は良好。色調は濃赤茶色。26は口径 20cm 。体部は半球形をなし、直口する口縁部は端部が鋭く内傾する。胎土は粗く小～粗砂粒を多量に含む。色調は内面が灰色、外面が淡褐色。27は口縁部を小さく外方に擴み出

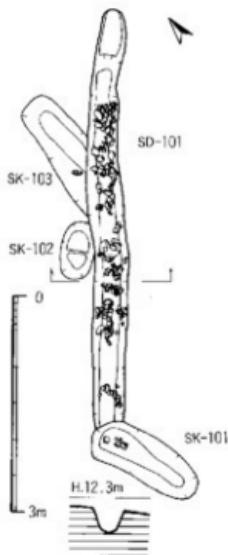


Fig. 24. SD-101実測図 (1/80)

す。28～30は「く」字状口縁の器である。28は大型の器で、内唇を小さく上方へ挿み上げている。30は口径19.4cmを測る上師器甕である。口縁部はストレートに外反し、胴部は肩が張らない。胎土は粗く小～粗砂粒を多く含む。色調は灰褐色。

15は鉄鎌である。全長13.9cm、身幅4.5cm、刃部長9.0cm、刃幅2.5cm、背厚3～5mmを測る。刃部は身から半弧状にのび、柄の装着部は小さく折り返す。

19は黒曜石製の無茎石鎌で先尖部を欠く資料である。身幅は2.1cmを測り、長さは3.0cmに復原できよう。

S D-103 (Fig. 25)

調査区の北東邊にある溝で、北半部はSC-102を切り、南半部はSC-101に切られているためにその全容は知りえない。溝幅は40～60cm、深さは25～30cmを測り、断面形は逆台形を呈する。覆上中からは弥生上器と上師器片が出土しているが、量的には少ない。

31は大型甕の底部である。器壁は厚く、底部は尖りぎみの丸底である。調整は内外面とも刷毛目後にナデて仕上げている。胎土は粗く粗砂粒を多く含む。

5). その外の遺構と遺物

第2面では豎穴住居址や土壤の外には、谷筋上や谷の南側斜面上で不定形の不明遺構がある外に、北側斜面ではPit等を検出した。不定形の遺構は大型で壁面のやや不明瞭な浅い凹み状をなし、土壤とは明らかな相違を示す。また、Pitは明瞭な柱痕跡を残すものもあるが建物址としては捉えられなかったものであり、その出土遺物は掘立柱建物址の時期決定に示唆を与えるものである。

出土遺物 (Fig. 25, PL. 10)

32はSP-123から出土した上師器甕で、胴部は球形は大きく膨らむ。33はSX-102出土の高环である。底径は11cmの脚部はラッパ状に開き、下位に3孔を穿つ。外面は刷毛目調整後に継方向の暗文を施している。内面には絞り痕が残る。胎土は精良で赤茶色を呈す。焼成は良好。34・35はSX-103より出土。34は底径5.0cmを測る甕の底部である。小さな凸レンズ状の底部に胴部がつくものであろう。胎土には小砂粒を多く含み、灰褐色を呈する。35は上師器甕である。口径は12.2cm、器高は15.5cmを測る。胴部は球形をなし、口縁部は直口したのちに小さく外反する。調整は口縁部が横ナデ、胴部はナデで仕上げている。胎土には粗砂粒を多く含み、色調は黄褐色を呈す。

20はSP-142出土の打製石鎌の先尖部である。石材は漆黒色の黒曜石を用い、現長は1.9cmを測る。

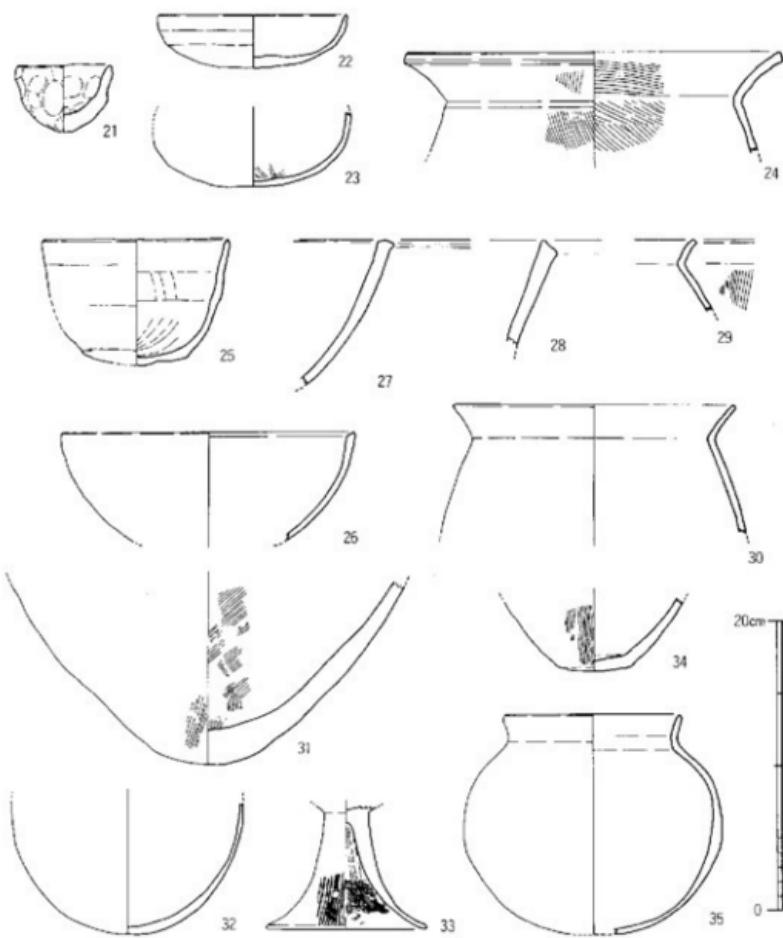


Fig. 25. 第2面遺構出土土器実測図 (1/4)

4. 第3面の調査

第3面では、10基の土壙と多数のピットを検出した。これらの遺構は調査区の中央部に寄入した浅い谷の地山面で検出したものである。遺構検出面が谷部に限られるためにその分布する範囲も調査区の縁辺を除いた中央部から東半部にかけてやや疎らな茲かりを示す。検出したピットの中には直徑10cm内外の柱痕跡を明瞭に残すものもあるが、掘立柱建物址としてのまとまりをもつものは検出できなかった。



Fig. 26. 第3面遺構配置図 (1/200)

1). 土 壤

第3面では10基の土壤を検出した。平面的にはSK-201が方形プランをなす以外はいずれも楕円形プランを呈する。このうち方形プランのものは壁下に浅い周溝を穿ち、椭円形プランをなす一群とは明らかに相違を示す。この違いはその果たす機能に起因するものであろう。これらの土壤群は、谷斜面の底近くに弯入する谷に沿ってU字状に分布し、土壤同志の切り合はない。また、壇内からはSK-201を除いては遺物がほとんど出土していないために明確な時期は決しがたい。

SK-201 (Fig. 27, PL. 8)

調査区の南端に位置する方形プランの土壤で、浅い谷の南側緩斜面上に立地する。東2mの距離にはSK-210がある。土壤は、長辺が223cm、短辺が205cmのほぼ正方形をなし、主軸方位をN-41.5°-Eにとる。土壤の南半と北端には造り出しによるベット状の段が付き、北壁を除く三壁下には幅15~20cmの浅い周溝が巡る。壁面の深さは33cmで、立ち上がりはほぼ垂直である。覆土内からは器片がわずかに出土している。

SK-202 (Fig. 27, PL. 8)

調査区の南東端に位置する土壤で、北西3.5mの距離にはSK-201がある。平面形は長軸195cm、短軸90cmの楕円形プランになろう。主軸方位はN-65°-Eにとる。土壤は東側と南端にフラット面を作り、西側が1段下がる2段振りで舟底状の断面形をなす。壁面は緩やかに立ち上がり深さは45cmを測る。

SK-203 (Fig. 27)

調査区の南西端に位置する土壤で、SK-201より西へ3.5mの距離にある。平面プランは長軸206cm、短軸45~65cmの長楕円形をなし、N-48.5°-Eに主軸方位をとる。土壤は東側に2段、西側に1段のフラット面を作つて壇底に到る梯子形の断面形をなす。壇底までの深さは東側で20cm、西側が55cmを測る。

SK-204 (Fig. 28)

調査区の北西端に位置する土壤で、SK-205のすぐ北西に隣接している。平面プランは長軸223cmが、短軸が50~98cmを測る不整楕円形をなし、主軸方位をほぼ東西方向にとる。土壤は

遺構番号	法算(長軸×短軸×深さ)	主軸方位	平面形	断面形	出土遺物
SK-201	223×205×23	N-41.5°W	方 形	柏 一型	骨生上器?
SK-202	105×90×45	N-65° E	椭 圆 形	舟 底 形	
SK-203	206×65×39	N-48.5° E	長 椭 圆 形	梯 子 形	
SK-204	223×98×67	E-30°-N	不整椭円形	舟 底 状	
SK-205	184×75×51	N-84°-E	椭 圆 形	梯 台 形	
SK-206	162×78×28	N-49° E	隅丸長方形	梯 台 形	
SK-207	142×63×34	N-29°-E	椭 圆 形	梯 台 形	
SK-208	157×75×32	N-35.5°-E	椭 圆 形	梯 台 形	
SK-209	157×83×60	N-22°-W	椭 圆 形	梯 台 形	
SK-210	205+φ115+φ27	N-38°-E	隅丸長方形	舟 形	

Tab. 3 第3面土壤一覧表

西側に小さな瘤状の突出部を作り、平坦な面になる。壁面は緩やかに立ち上がり、壌底までの深さは67cm、壌底からフラット面までは29cmを測る。断面形は浅い舟底状をなす。

SK-205 (Fig. 28)

調査区の北西にあり、SK-204のすぐ南に隣接して位置する。平面形は、長軸184cm、短軸55~75cmの楕円形プランを呈し、主軸方位をN-84°—Eにとる。土壤の西側には壌底より11cmのところに小さなフラット面を作る。壁高は51cmを測り、断面形を逆台形を呈する。

SK-206 (Fig. 28)

調査区の北部に位置する土壤で、SK-204~207と一群をなす。平面形は長軸162cm、短軸78cmの隅丸長方形プランを呈し、N-49° Eに主軸方位をとる。壁面はやや急峻に立ち上がり、深さは28cmを測る。断面形は逆台形を呈し、壌底は浅い凹レンズ状をなす。

SK-207 (Fig. 28)

調査区の北部にある土壤で、SK-206の西方1mの距離に位置する。平面形は長軸142cm、短軸63cmの楕円形プランを呈し、N-29° Eに主軸方位をとる。壌底は平坦で、緩やかに立ち上がる壁面は深さ34cmを測る。断面形は逆台形をなす。

SK-208 (Fig. 28, P L. 8)

調査区の北東部にある土壤で、SK-209の北约2mに位置する。平面プランは長軸157cm、短軸75cmの椭円形を呈し、主軸方位をN-35.5° Eにとる。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は32cmを測る。壌底は浅い凹レンズ状をなし、断面形は逆台形を呈する。覆土は壌底に赤褐色土が薄く堆積し、上層は褐色土になる。

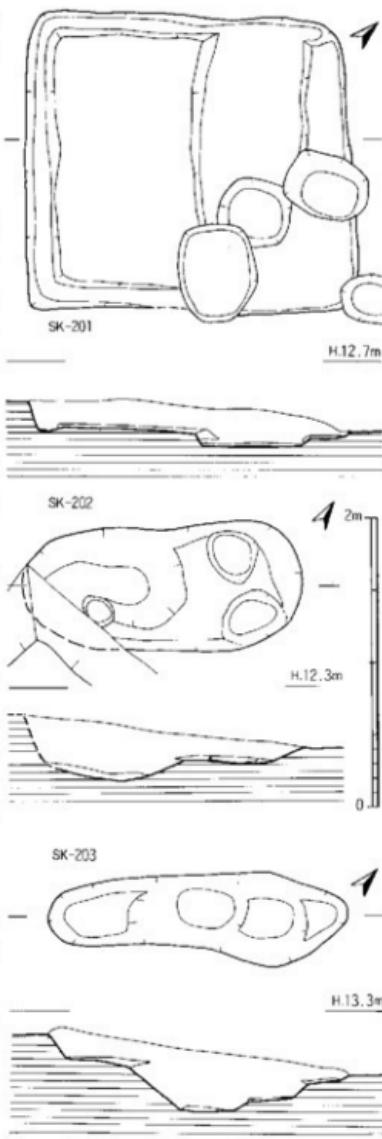


Fig. 27. SK-201~203実測図 (1/40)

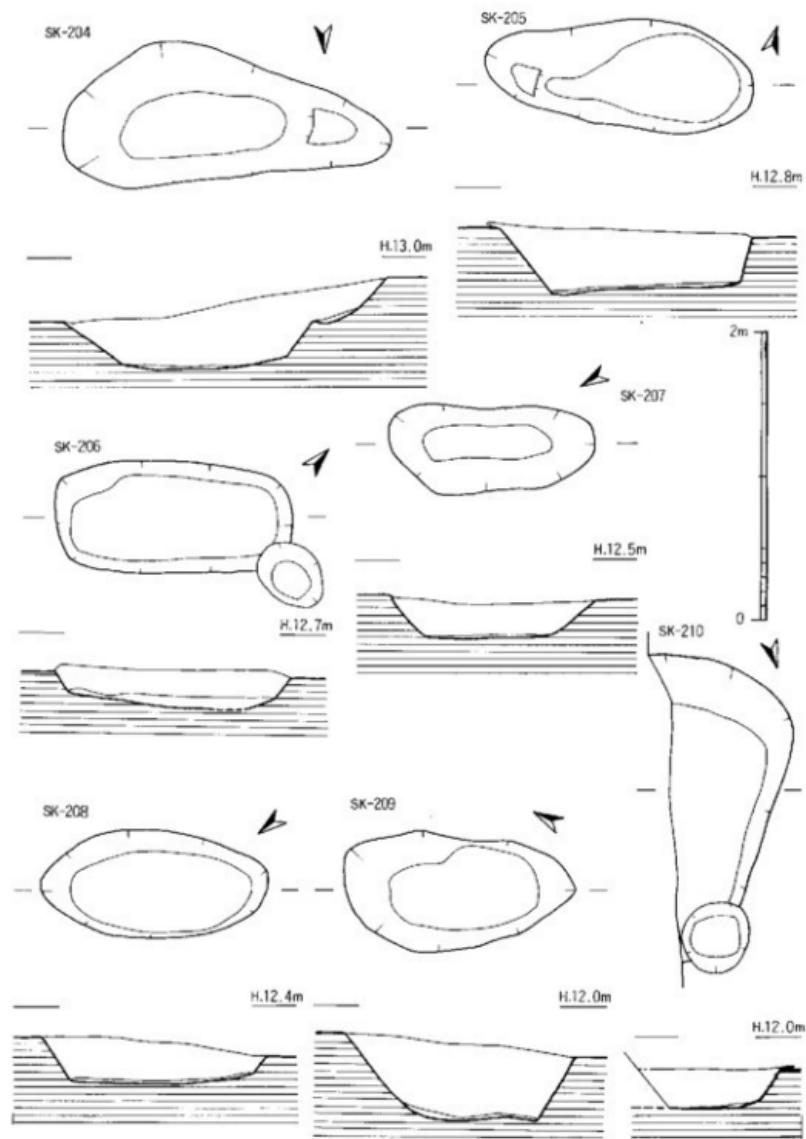


Fig. 28. SK-204~210実測図 (1/40)

S K-209 (Fig. 28, P L. 8)

調査区の北東端にある土壙で、S K-208より南へ約2mの距離に位置する。平面形は長軸157cm、短軸83cmの楕円形アランを呈し、N-22°-Wに主軸方位をとる。壁面は北側が緩やかに立ち上がるほかは急峻に立ち上がり、壁高は60cmを測る。断面形は逆台形をなし、壙底には小さな凹凸がある。

S K-210 (Fig. 28, P L. 8)

調査区の南東部にある土壙で、S K-201の東2.5mの距離に位置する。平面形は東半部が調査区外にあるため明確ではないが、長軸220cm、短軸140cmの隅丸長方形に復原できよう。主軸方位はN-38°-Eにとる。壁面は小口側は緩やかに、側壁側はやや急峻に立ち上がる。壁高は27cmを測り、断面形は逆台形をなす。

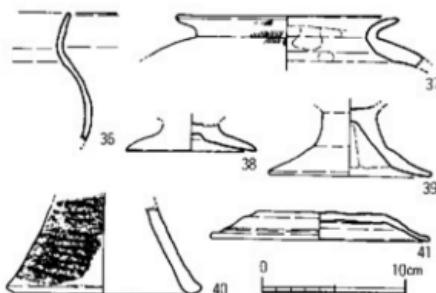


Fig. 29. 包含層出土土器実測図(1/4)

5. 包含層の遺物

調査区の中央部には前述したように東に開口する深い谷が湾入し、この上面には厚さ20~60cmの遺物包含層が堆積し、その上面と中位の2面で遺構面が確認されている。この包含層中には弥生時代から古墳時代の遺物を含むが層位的な時期区分はできず、各面の時期を細かくは限定できない。また、この包含層中の遺物は量的に少なく、小片が多いために図示し難いものもある。

出土遺物 (Fig. 28, P L. 8)

36・37は土師器壺である。36は口縁部が小さく「く」字状に外反し、胎土には小~粗砂粒を多く含む。37は口径15.3cmを測る。口縁部は短く鋭角的に外反し、胴部は大きく球形に膨らむ。調整は外面が刷毛目、内面は指頭押圧後にナデて仕上げる。38・39は土師器の台付鉢脚台である。38は底径9.0cm。脚部は短く内弯気味に開く。胎土は精良で色調はくすんだ茶色を呈する。39は底径11.3cmを測る。脚部は短くラッパ状に開く。調整は内面が横方向のヘラケズリとナデ、外面はヨコナデ、胎土には小砂粒を含み濃赤茶色を呈する。40は底径13.5cmの器台で、脚根は直線的に開く。調整は外面が叩き、内面はナデで仕上げる。胎土には小~粗砂粒を多く含む。41は須恵器壺蓋で口径は15.1cm、器高は1.9cmを測る。天井部は圓平で、口縁部は小さく内方に摘み出している。胎土には小砂粒を少量含み焼成は堅緻。色調は灰色。

III. おわりに

飯倉A遺跡は、油山西麓から北へ下限・飯倉へと長くのびる丘陵北部の本丘陵から西へ又状に分岐した支丘陵上に拡がる遺跡群で、第1次調査区はこの支丘陵の東側緩斜面上に立地する。調査区は東西20m、南北30mのきわめて限られた範囲の調査であり、かつ丘陵の東斜面に立地すると云う条件下にあってそこから得られる情報は限られた断片的なもので遺跡の性格や全体像を十分に把握することはできなかった。

第1次調査では、弯入する深い谷上に堆積した遺物包含層上で3面の遺構面を確認した。この遺物包含層は弥生時代後期から古墳時代初め頃の壺や甕片を中心的に含み、古墳時代初頭期には谷の埋没はほぼ完了していたものと思われる。

第1面では、竪穴住居址1棟、掘立柱建物址3棟、土塙15基と溝遺構を検出した。そのうち竪穴住居址は壁際にベット状遺構の付設が想定されるものであるが、遺物が土器細片のために明瞭な時期は決定できない。土塙も良好な遺物の出土がない。しかし、そのほとんどが弥生後期から古墳時代初めの土器片を含み須恵器は出土していない。このことからすれば竪穴住居址を含め古墳時代初めに比定されよう。ただし、掘立柱建物址については丘陵上のピットに8世紀代の环を出土するものがあり、この期まで下る可能性も考えられる。

第2面では、竪穴住居址2棟、掘立柱建物址1棟、土塙18基と溝遺構を検出した。竪穴住居址S C-101からは弥生後期の手挽ね土器が出土している。土塙の遺物も同期のものが主体を占める。また、竪穴住居址の西側をはしる溝S D-101には鉄鎌とともに弥生後期の甕片等が括投棄されていた。この溝は緩斜面上に立地する集落の区画を意味するものであろうが、調査区の狭小さから住居址群との関わりは明らかではない。これらのことからすれば第2面の遺構群は弥生時代後期に位置付けられる。ただし、掘立柱建物址は第1面の建物址群と重なる位置にあり、かつ丘陵斜面の包含層の薄い地点であることから第1面遺構のものかとも考えられる。

第3面では、土塙10基を検出した。そのうち方形プランのS K-201は両壁にベット状の遺構が付設しており住居址的機能の保有が想定される。しかしながらこれらの遺構からは1点の遺物も出土しておらず時期の特定はできないが、弥生後期以前とだけは云えよう。

以上のことから第1次調査区は、南に深い谷を挖えた丘陵の南東斜面上に立地する集落遺跡である。集落は弥生時代後期初め頃に始まり、谷の埋没に合わせて雛桟状に造成されて古墳時代初めまで引き続いている。その後一旦途絶して奈良時代に至って再開発されている。立地的には北方から吹き込む海風を遮る陽当たりの良好な位置にあたり、同期における丘陵の活用形態を窺う一資料となろう。

P L A T E S



遺跡周辺航空写真

(1) 第1面南側調査区全景(北より)



(2)

第1面北側調査区全景
(南より)

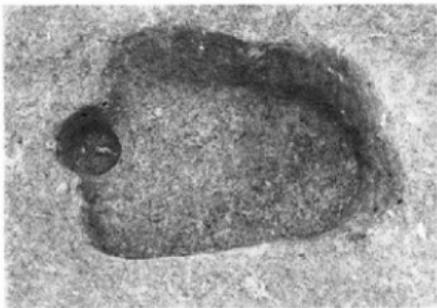


(3)
S C-01
(南より)

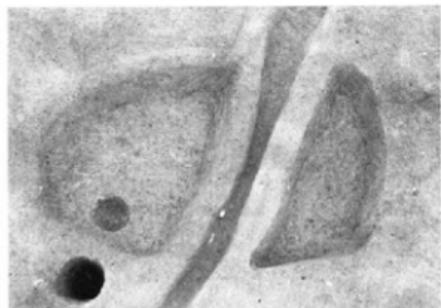




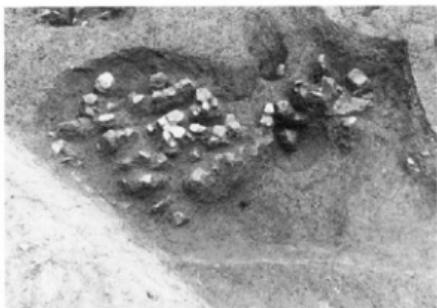
(1) SK-01・02 (西より)



(2) SK-04 (東より)



(3) SK-05 (東より)



(4) SK-06 (東より)



(5) SB-01～03全景 (南より)



(6) SD-03 (東より)

(1) 第2面南側調査区全景（北より）



(2) 第2面北側調査区全景（南より）



(3) S C - 101 - S D - 101 (北より)

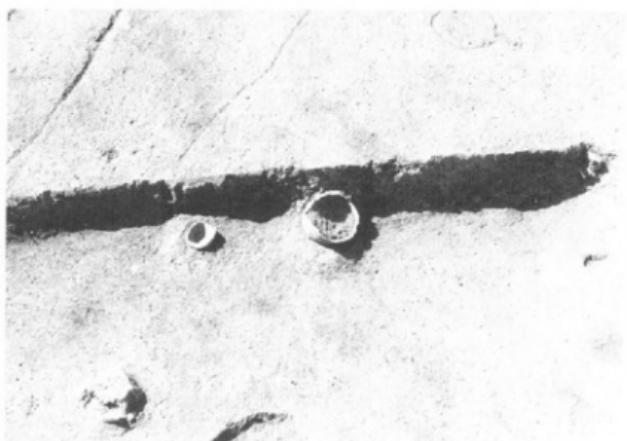


PL. 5

(1)
S C
101
(北東より)



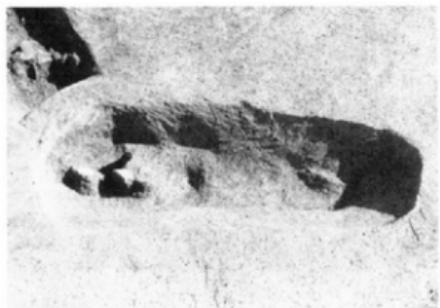
(2)
S C
101
遺物出土状況(東より)



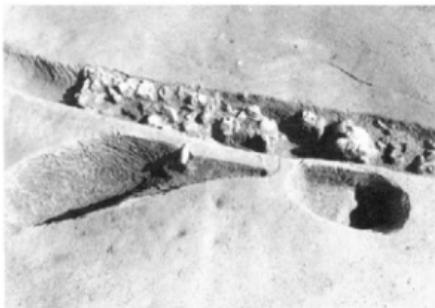
(3)
S C
102
(南より)



PL. 6



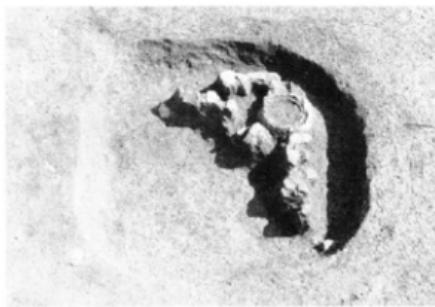
(1) SK-101 (西より)



(2) SK-102 + 103 (西より)



(3) SK-106 (東より)



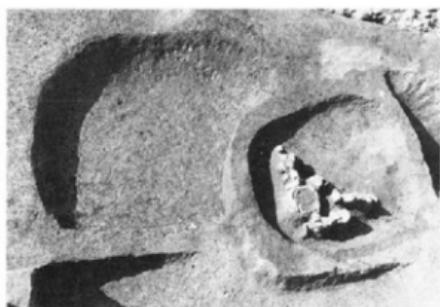
(4) SK-107 (西より)



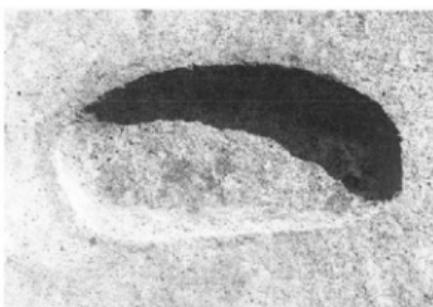
(5) SK-108 (西より)



(6) SK-113 (東より)



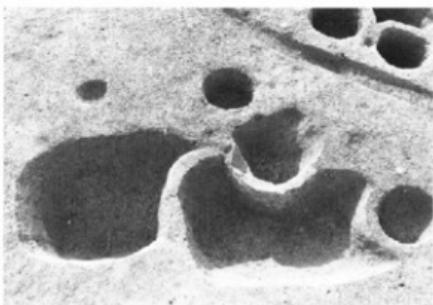
(1) SK-114 (東より)



(2) SK-115 (北より)



(3) SK-116 (東より)



(4) SK-117・118 (北より)



(5) SD-01・SK-101～103(東より)



(6) SD-101 遺物出土状況 (東より)

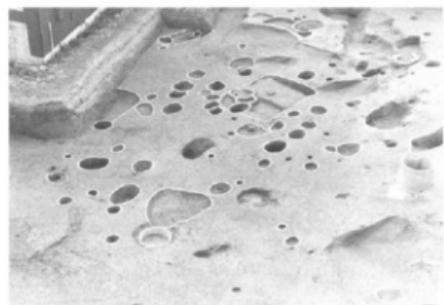
PL. 8



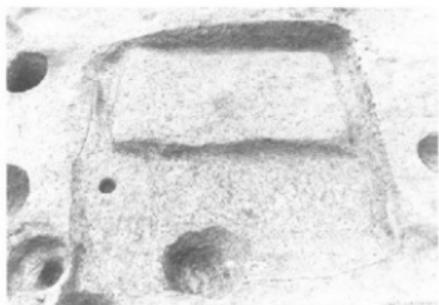
(1) 第3面南側調査区全景（北より）



(2) 第3面北側調査区全景（南より）



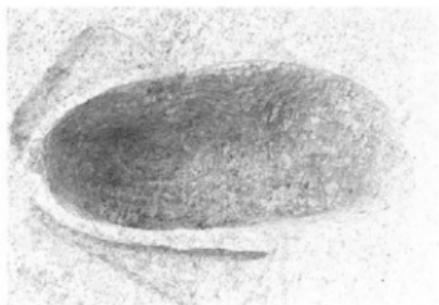
SK-201・202・210（北より）



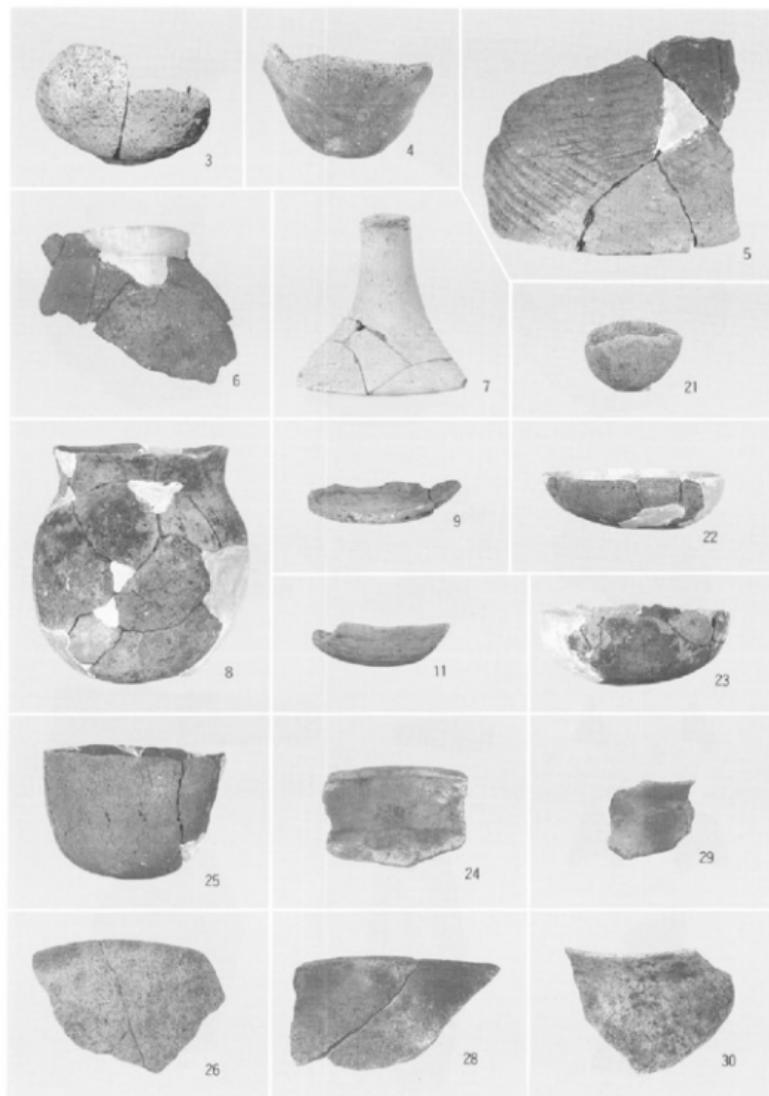
(4) SK-201（北より）



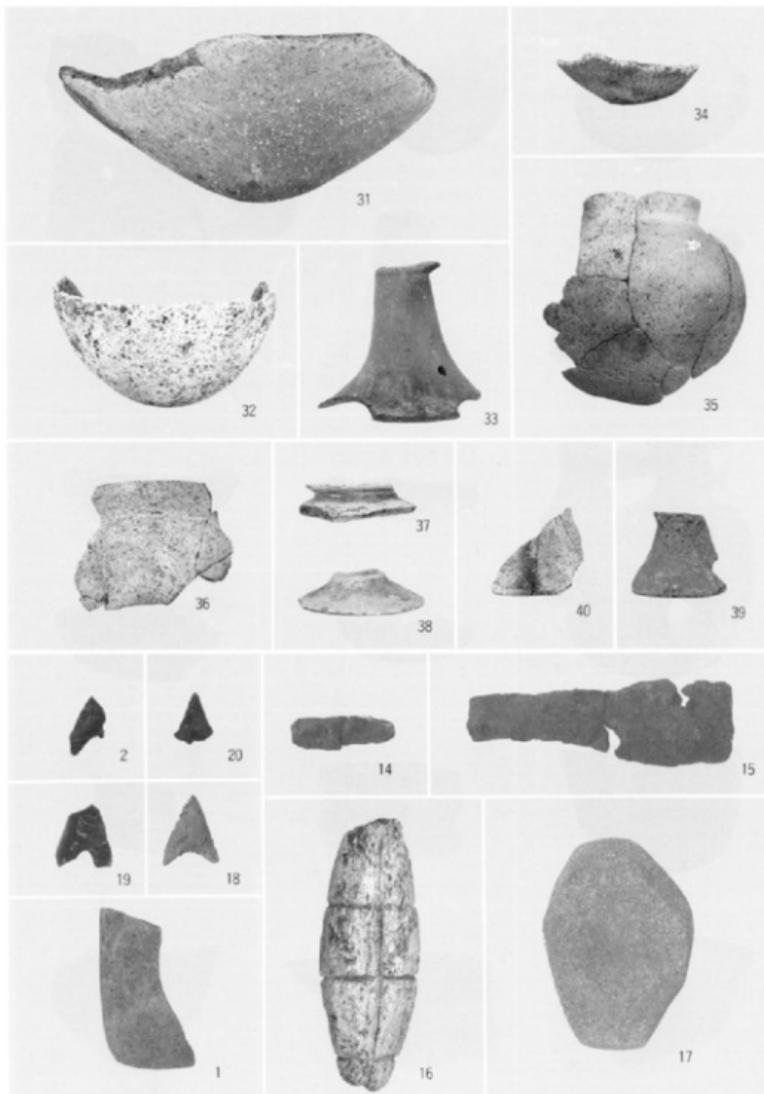
(5) SK-208（北より）



(6) SK-209（東より）



出 土 土 器



出土土器・鐵器・石器

飯倉 A 遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第296集

1992年3月13日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1
印刷 大野印刷株式会社
